首輪付きと白い閃光と停滞の異世界物語

紅月黒羽

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

独立傭兵、ラキラ

天才リンクス、オッツダルヴァ

伝説の英雄、アナトリアの傭兵

この三人は企業からのミッションにより戦い、それぞれの未練を残し散った。

そうして目が覚めたのは見慣れない場所。彼らは異世界に生まれ変わり自分たちの成すべきことの為に今日も生きる。

その手に握る引き金は何のためにあるのか。彼らはそれを探すことができるのだろうか。

目　次

第０話　夕暮れのラインアーク　1
第１話　相棒との訓練　15
第２話　出会いそして想い　25
第３話　決意　40
第４話　理想　46
第５話　現実　54
第６話　救いの手はそこに　67
第７話　道標　82

第０話　夕暮れのラインアーク

そこは水上に浮かぶ巨大な橋とも言うべき場所だった。幾つもの道路が敷かれ水没したビルが建っている場所に二つの影があった。一つは最近頭角を現している傭兵―ラキラ。ネクストは漆黒の機体ストレイド。　そしてカラードランク１―オッツダルヴァ。搭乗機体はステイシス。この二人はこの場所―《ラインアーク》で目標を待っていた。

そして……

フオオオオオン

ＯＢ（オーバードブースト）で上空から舞い降りて来たのは純白の輝きを持つ機体―ホワイト・グリント。ラインアークに所属しているネクスト、そしてそのリンクスは伝説と呼ばれたアナトリアの傭兵だった。

『こちら、ホワイト・グリント。オペレーターです。貴方達は、ラインアークの主権領域を侵犯しています。速やかに退去してください。さもなければ実力で排除します』

「フン、フィオナ・イェルネフェルトか。アナトリア失陥の元凶が、何を偉そうに」

通信機越しから聞こえてくる僚機の声。その声には嘲りや皮肉が混じっていた。俺たちは企業から依頼されたミッション―【ホワイト・グリント撃破】を果たすためにここにいる。

『…どうしても、戦うしかないのですね』

悲痛な声で呟くフィオナ。そんな声など聞こえなかったようにステイシス（僚機）はＯＢで一気に加速していく。俺も自分の役目を果たすためホワイト・グリントに近づく。

オッツダルヴァはカラードランク１に君臨している。それはつまり、ランクだけ見るとオッツダルヴァこそカラードに所属しているリンクスの中で最強ということになる。実際俺がまだリンクスになったばかりのとき僚機としてミッションで出撃したときも、機体性能を活かしながらＱＢ（クイックブースト）で敵を翻弄し、正確な射撃で敵を撃ち抜いていた。敵も反撃をしようとしても、速すぎて照準が追い付けていなかっ

た。それほどのリンクスだというのに今回のミッションでは二人がかりでやれというのだ。
相手はカラードランク９のリンクス。ランクだけを見ればランク３の俺やオッツダルヴァと比べれば低い。しかしランクだけで判断をするのは素人がすることだ。彼はリンクス戦争を生き残り、その後数々の戦績を残してきたいわば英雄だ。それに企業に敵対しているラインアークがなぜここまで生き残っているのかはホワイト・グリントが証明している。つまり企業の連中も中々手が出せないほど強い、ということだ。
（やれるのか…俺に…）
戦いの場で迷ったり恐怖心を植え付けられたものは役に立たない。それを分かっていながらも、俺は不安にならずにはいられなかった。
『どうした、今頃になって怖じ気づいたか？』
そういって声をかけてくるのは俺のオペレーターのセレンだった。彼女は俺の面倒をよく見ていてくれた。ネクストのことに関しても俺の師匠でもある。長年付き合っているせいか俺の緊張を感じたのかもしれない。
『いいか、お前の持てる力を全て出しきって戦え。大丈夫だ、お前なら勝てる。私が育てたのだからな』
そんな確証もない励ましだったが俺の不安を払うのには充分すぎるくらいだった。
「ああ、勝ってくるよ、セレン」
全くこれほど頼りになるオペレーターがいるだろうか。
彼女がいたからここまでこれた。だったら自分は彼女の期待に応えよう。それが自分に出来ることなのだから。
そして最強最悪（ネクスト）の兵器同士の戦いが始まった。

ストレイドの装備はマシンガンにブレード、散布型ミサイル（MP-O200ITRESOR）、プラズマキャノンという、近中距離戦向け中量二脚型の機体だ。対するホワイト・グリントも中量二脚で右腕にライフル（051ANNR）、左腕にアサルトライフル（063ANNAR）、両肩にミサイルという具合だ。

03-MOTORCOBRA　02-DRAGONSLAYER　SALIN05

近つけば簡単と思うかもしれないが、その近づくのが難しいのだ。ホワイト・グリントは並のリンクスでは扱えない二段ＱＢをしてくるのだ。二段ＱＢとは通常のＱＢと比べると数倍の出力でブーストすることができる。しかも途切れることのなく続けるのだからどうしても、距離が空いてしまい相手の距離に持ち込まれる。そしてそれを扱うリンクスの腕も並のものではないだろう。ＥＮの管理、敵の位置状況それらを全て把握しきっているのだからこれほどの動きが出来るのだろうと。

（確かに速い…だが！）

ラキラも負けじと二段ＱＢでホワイト・グリントに近づきブレードを振るう。惜しくも浅くしか入らなかったがこちらのペースに持ち込むには充分だった。

アサルトライフルとミサイルで弾幕を張り、相手のＰＡ（プライマルアーマー）を削り、ブレードでの一撃を狙う。相手がストレイドから離れようとすればステイシスからの援護で動きを封じる。しかしホワイト・グリントもただではやられない。隙を見てはライフルのトリガーを引き、ミサイルで離れさせる。この多弾頭ミサイルも厄介だ。八発の追尾ミサイルは、速度、威力、追尾性能、何れも高性能だった。

『ステイシスから熱源感知！ＰＭミサイルよ、気をつけて！』

ステイシスは本来の用途とは違うアセンブルだった。その機体は近距離向きの機体だというのにオッツダルヴァは中距離射撃戦向けにしていた。しかしそれが今回はストレイドと相性が良かったのだろう。お互い近距離と中距離を分けて戦い、ホワイト・グリントを押していく。

『いいぞ、その調子だ。相手の距離に持ち込ませるな！そうなれば勝ち目がなくなるぞ！』

セレンからの通信もラキラは理解していたが、今の戦況は膠着状態と言えるだろう。照準をあわせられないようＱＢで避け、ＡＰを削ろうとトリガーを引くがどちらも当たらない。当たったとしてもＰＡに防がれて大したダメージにならない。大威力な一撃か継続的に攻撃しなければプライマルアーマーは壊れない。たとえ壊れとしても

一気に決めなければ回復してしまう。
だから必死に食らいつく為に二段ＱＢを躊躇いなく使う。ＡＭＳから流れ込んでくる情報が脳の中で暴れまわるが構っていられない。何故なら

「ああ、この感じだ…この高揚感！俺には戦いが必要だ！」
ラキラは楽しんでいた。別にラキラは人殺しが好きなわけではない。ただ純粋に楽しいと思っているのだ。それは子供が遊んでいるときと同じように。被弾すれば一気にやられる。しかしどちらも避ける。海上で、白と黒が舞う。一手一手先を読みながら命の駆け引きをする。それがラキラにとって最高の喜びだった。互いに全力を出しあい、戦う。こちらの攻撃が通ったかと思えば思いもよらぬ動きをして避ける。そうして反撃してくる相手をこちらも受け流す。次にどんな手で攻めてくるかわからない。そんな戦場でしか味わえない気分をラキラは楽しんでいたのだ。
『まったく、こんなときだというのにお前は…』
セレンが呆れてため息をついていたがラキラには聞こえていなかった。セレンからすれば回りが見えなくなってつまらないへまをするのではないかと内心ハラハラしていたが、むしろラキラの動きは洗練されていた。
あらゆる方向からの攻撃を全て捌ききっている。
二段ＱＢによる高速戦闘をしているというのに最小限の弾薬でミサイルを撃ち落とし弾幕をかわす。
『なんて動きなの…』
いくら傭兵のＡＭＳ適性が低いといえど、今まで戦ってきた猛者達との激闘で得た戦闘経験は並みではない。それは適性などでどうにかなるものではなく、傭兵自身が作り上げたものだ。だというのに目の前の新人（ルーキー）は傭兵と互角以上に戦っている。数の差があるとはいえ殆どストレイドがホワイト・グリントを押さえ込んでいる。ストレイドから少しでも意識を外せば一瞬にして沈められる。そんな予感が

傭兵にはあった。しかし意識を向けすぎると今度はステイシスの攻撃が飛んでくる。まるでストレイドがホワイト・グリントをステイシスの撃ちやすい場所へ誘導しているように見える。

「あのときとは比べ物にならなくなったな、君は」

オッツダルヴァが初めてラキラとあったのはミッションの僚機としてだ。新人リンクスのお守りをするなどあまり趣味ではなかったが、楽に報酬が貰えるならいいかと思っていた。しかし、リンクスになったばかりだというのにラキラの動きは圧巻だった。まだおぼつかないような動きはしていたがそれを差し引いても充分な強さだった。そのときから少なからずオッツダルヴァはラキラに興味を持ち始めた。オーメルが企画したパーティーに彼が来ると聞いたときは迷わず自分も出席した。オッツダルヴァはあまりパーティー等には出ないのだが珍しく来るということで上層部も困惑していた。

あまり人付き合いには馴れておらず自分の性格も合わさり、友人と呼べるのは数人くらいしかいなかったが、ラキラには自分から声を掛けに行こうと思った。しかし名前が分かっても顔が分からなければ声も掛けられない。そんなことを考えていたら、

「やめてくれ、セレン。子供じゃないんだからさ」

「おいおい、その年にマナーのひとつやふたつ出来ずに何が子供じゃないだ、なぁラキラ?」

「うっ…」

「だいたいお前は……」

まるで親子だなと思いながらも目的の人物が見つかったので声を掛けに行く。

「話の途中すまない、いきなりだが君がラキラか?」

「あ、あぁそうだけど貴方は?」

ラキラの方はまだ自分のことを分かってはいなかったようだが、

「どっかで聞いたような気がするんだけど…」

と呟いていたので忘れたわけではないのだろう。

「お前は…」

「久しぶりだな、霞スミカ。いまではセレン・ヘイズだったか」
「セレン、知り合いだったのか？」
「知り合いも何もお前も知ってるやつだよ。会ったことは今回が初めてだがな、オッツダルヴァ」
「あの天才のか？」
「そうだ…それでその天才がなんのようだ？前のミッションの皮肉でも言いに来たか？」
　随分な言われようだったが、実際自分は毒舌家で上から目線な言動が多いのは自覚しているので気にはしない。

「いや、そういうわけではない。彼に興味を持った。それだけだ」
「ほぉう、一体どういう風のふき回しだ？お前が他人に興味を持つなど以外だな」
「彼はリンクスになってから日が浅い。それでもあれだけの動きをしてみせた。そんなリンクスがどんな人物なのか確認したかったのさ」
　セレンが探るようにこちらを見ていたが、他意はないと思ったのか視線を上げる。
「ふん、何を企んでいるかは知らんが一応こいつを認めたことには感謝してやるさ」
「そうしてくれると助かる。君もこれから頑張ってくれ。敵としては戦いたくはないがね」
「あぁ、こちらこそよろしくな」
　初めて見た印象は正直言って子供かと思った。あどけなさが残る顔に身体もあまり大きくはなかった。しかし、オッツダルヴァはラキラの戦闘のときとの違いに面白さを感じていた。あんな子供っぽさが残っているが戦闘になれば上位リンクス顔負けの動きになるのだから。
　その後もラキラは順調にその技術を伸ばしていった。そしてランク3となったところに今回のミッションが入ってきた。

―――――――――――――

「ここまで強くなるとは想定外だったよ。つくづく君には驚かされ

る」
　密着し、ブレードで切りつけようとするストレイド、それを引き離そうとするホワイト・グリント。オッツダルヴァも付いていってはいるが、二人のリンクスの次元が違いすぎる戦いを見て、この二人は規格外（イレギュラー）としか思えなかった。
「私には役不足かもしれん。だが私とてランク１のプライドがある！」
　弾幕が厚くなりホワイト・グリントの動きが鈍る。その隙にストレイドがブレードでこの戦いに幕を閉じようとした。だが…
『…まずい！離れろ！』
　ホワイト・グリントの全身から緑色の粒子が放出される。ラキラもホワイト・グリントが何をしようとしているのか気づいたが既に間に合わなかった。ＱＢでブレードを回避し、すぐさまＱＢでストレイドに接近する。
　ホワイト・グリントの体の所々にある六角形のパーツがせり上がる。そしてカシャッ、という音と共にカメラアイの保護シャッターが降り、次の瞬間ホワイト・グリントが纏っているコジマ粒子が周囲を飲み込んだ。
　――アサルトアーマー
　近年開発されたコジマ粒子の応用兵器だ。ジェネレーターに格納されているコジマ粒子を解放することで広範囲に無差別攻撃をすることができる。そしてそれは威力が高いだけでなくコジマ粒子の特性で相手のＰＡを一時的に無効化することができる。加えて機能障害を引き起こす効果もありネクストといえど完全には防げない。
『ＡＰ、４０％減少！簡単には終わらせないということか…』
『直撃を確認しました！ストレイドを重点的に狙ってください！』
　あの劣勢の状況からここまで巻き返したホワイト・グリントの判断には舌を巻くしかなかった。ＡＰは半分近くになりＰＡも消滅している。ＰＡが消滅しているのはホワイト・グリントも同じだが、ストレイドのフレームのＡＡＬＩＹＡＨ（アリーヤ）は装甲が薄くＰＡに頼るところが大きい。まともに攻撃を受けたら一瞬にして沈んでしまうだろう。

「無事か？ここは私に任せて君は回避に専念してくれ」
「すまんが、頼んだ。ＰＡが回復したらすぐに戻る」
　攻撃はステイシスに任せ、ストレイドは回避に徹する。しかしステイシスもＰＡがあるとはいえそのフレームは速さを求めたためストレイドと同じように薄い。多少の不安がラキラの中にはあったがオッツダルヴァを信じることにした。
（さすがと言うべきかホワイト・グリント。いや、この場合はリンクスの方が正しいか。レイレナードの先鋭を退け、更には本社を崩壊させたその実力、伊達ではないか…そして彼も英雄を相手にあれだけの動きをした。ならば私も負けてはいられないな）
「見せてみろ。リンクス戦争の英雄の力を！」

　ＱＢで的を絞らせないように動く。右腕のライフルと左手のレーザーバズーカのトリガーを引きながらミサイルを絡めていく。ステイシスとは直訳すると【停滞】という意味がある。それは自分以外は止まって見えることから付けられた。それほどの速さがあるのだ。加えてオッツダルヴァはＡＭＳ適性が他のリンクスと比べると桁違いに高い。それゆえステイシスの動きが機敏なのだ。傭兵が技術を武器にするならオッツダルヴァは才能を武器にしている。しかしオッツダルヴァは自分の才能だけでランク１になったわけではない。才能に溺れたら最後に待つのは死だけだ。
　レイレナードが崩壊しオーメルに取り込まれたとき気づいた。人とは他者を蹴落とし、自分のことだけを考える愚かな生き物だと。仲間や友情、そんなものだけにしがみついていてはいつか裏切られ後悔する。そして力無き者は生き残れない。
”all is fantasy”
この世界の全ては幻想だ。
　企業などという利益しか求めない屑どもの集まり。優遇されのうのうと生きているクレイドルの人間たち。そして汚染され土地も少ない地上に残された人間。着実に蝕まれていく地上。それを理解せず企業は日々争いを起こす。
”oh, I’m scary” ”so, I’m scary”
おお、私は恐れている。そうだ、私は恐れている。

この世界がこれで成り立っていることが。それを変えられない人類が。しかし変革をもたらすなら力が必要だ。アナトリアの傭兵のように。

だから私は戦い続けた。

しかし彼女と出会いその考えは変わっていった。彼女の強い心に、信念に引き込まれたのだろう。そしてラキラとも出会った。生きるために力をつけ、誰かの為に戦う。そんなことでも私には輝いて見えた。

「くっ…」

ミサイル数発が直撃しＡＰが持っていかれる。ステイシスのＡＰの方がまだ多いだろうが、このままいくとどちらが勝つかはわからない。追尾性能の高いＰＭミサイルも当ててはいるもののいまひとつ決め手に欠ける。レーザーバズーカを当てれば話は変わるが、あの機動力を相手に直撃させるのは難しい。

『右腕左腕、残弾残り僅かです！』

流石にトップクラスのリンクス二人を相手にしていてはホワイト・グリントも攻めきれなかったのだろう。ホワイト・グリントも限界を迎えつつある。

『ミサイル残弾、左右どちらも残り六発です！もう後が……

っ！ＰＡ間もなく回復します！アサルトアーマー使用可能です！』

もうすぐこの戦いも終わると思っていたオッツダルヴァだったが、油断した隙に回避が遅れＰＡ消滅しＡＰが一気に削られる。

（こんなところで私は終わるのか…）

あの日から強くなるためだけに戦い続けたというのに。彼女やラキラと出会い、ようやく分かったというのに。結局英雄には勝てず、この地に果てる。ステイシスのフレームも所々破損し、左腕は既に使い物にはならないほどだった。あとは運命という死を受け入れるだけだった。しかし…

（なんのためにここにいる…なんのために今まで生きてきた。

私はこんなところでは終われない。まだやるべきことが私には有り余る程あるのだから！）

ステイシスに止めを刺そうとしたホワイト・グリントだったが異変に気付く。

『なんなのこれは…ステイシス出力上昇！気をつけて！』

『なにが起こっているんだこれは!?』

ステイシスのモノアイが再び蒼く輝く。剥がれたコジマ粒子がステイシスに集まり即座にＰＡを再展開する。通常とは比べ物にならない速度で回復したＰＡに驚いたフィオナとセレンだったがそれだけではない。

『この速さ…一体どういうことだ…』

先程とは違うブースト―二段ＱＢだ。ステイシスはその軽さでホワイト・グリントに付いていっていたが、今ではその逆だ。ステイシスが離し、ホワイト・グリントが付いていく。さっきとはうって変わったその状況にオペレーター二人は困惑を隠せなかった。

（…お前もまだ死ねないのか？）

オッツダルヴァは自分の機体に問いかける。勿論答えなど帰ってこない。だが言われずとも理解できた。こいつはついてきてくれると。今まであまり乗り気ではなかったオーメルの機体。しかし今では頼りになる相棒のような存在に感じる。

「大丈夫か！」

そこへ回復から戻ってきたラキラが心配そうな声で訊いてくる。ステイシスの損害を見て息を呑んでいたが「大丈夫だ」と軽く返したら安心したのかそれ以上はなにも言ってこなかった。

「さぁ、いこうか」

オッツダルヴァの一言で再び戦いの幕が上がる。

（驚いたわ。限界を迎えるはずだったステイシスがあんなことになるなんて。まるでリンクスとネクストが本当に一体化したみたい…）

機動力が増したステイシスとストレイドの猛攻で傭兵は勝つため

の策を考える。こちらはもう弾が少ない。アサルトアーマーはまだ残っているがタイミングを間違えれば更に不利になってしまう。凡人に勝つのならば既存の策でいけば問題ない。だが目の前のリンクス二人はそれを大きく上回っている。どこにでもあるような策で仕掛ければやられる。それを理解していた。ならば違う策でいけばいい。傭兵はただそう考え、行動に移す。

ＱＢで一度後方に下がり、引き付けてから瞬時に前方にＱＢをする。ホワイト・グリントの得意距離であるはずの中距離を捨てるという意表を突き、近距離での接射。これが傭兵の考えた策だ。アサルトアーマーを射っても良かったが、この状況でＰＡが無くなるというリスクは負いたくなかった。

左右のミサイルを一発ずつ発射しライフルへ切り替える。流石に接射となればＰＡも殆ど機能しない。これで傭兵が一気に有利になる。

はずだった。

ストレイドはなんとミサイルをものともせず突っ込んできた。正気の沙汰とは思えない行動だったがこの近距離からのミサイルの回避は難しい。そう判断したラキラはあえて突っ込みブレードで斬り込むことにした。ブレードが直撃しホワイト・グリントのＡＰが大きく削られ遂に０になった。

『ネクスト、ホワイト・グリントの撃破を…』

ラキラは海面に落ちていくホワイト・グリントを見据えながらセレンの通信を聞いていた。しかし、

『いや、待て…再起動だと!?有り得るのか、こんなネクストが…』

先程ステイシスに似たようなことがあったが、あちらは出力が上がっただけでＡＰが０になってはいない。それでも十分不可思議な現象だったが、ホワイト・グリントはその状態から蘇ってみせた。

『くそっ、どうしてこんなことばかり起こるんだ！』
半ば投げやり気味に叫ぶセレン。そんな驚いているセレンとは対照的にラキラとオッツダルヴァは落ち着いていた。天才アーキテクトのアブ・マーシュが作ったワンオフ機体、それがホワイト・グリントだ。ならばなにか一つくらい仕込んでいても不思議ではない。
『ここからが正念場だぞ！油断するな！』

ストレイドの残弾はもう底を尽きそうだった。マシンガンは一マガジンしかなく、プラズマキャノンも二発、ミサイルは無くなってしまったのでパージして機体を軽くした。唯一ブレードだけは弾を気にしなくていいが当てるのは難しいだろう。
ストレイドはプラズマキャノンを起動。マシンガンでＰＡを削りプラズマキャノンを叩き込むことにした。たとえ当たらなくてもこちらにはオッツダルヴァがいる。片腕がなくともその動きは鈍ることはない。今は数の有利を使って地道に削ることにした。二段ＱＢでホワイト・グリントに接近。マシンガンを放ちながら三次元的な動きで相手を翻弄しようとするが、ホワイト・グリントは難なく対処した。その間にステイシスからの援護もあったが後ろに目があるのかと思わせるほどの回避をしてみせた。
「なるほど…貴様も本気を出したということか」
空中で三つの輝きが舞う。ブースターの噴射炎が尾を引き、さながら流星のように見える。戦闘は過激さを増し、三機はどんどん上昇していく。
『綺麗……』
ラインアークを越え、戦場が空へと変わる。沈みかけた夕日を背景にリンクスたちは命を懸け戦う。しかしその戦いももうすぐ終わろうとしていた。三機が空中で止まる。
ストレイドはブレードにエネルギーを注ぎ、次の一撃に賭ける。ホワイト・グリントも弾薬が尽きアサルトアーマーしか残っておらず、ステイシスも右腕のライフルだけだった。
お互い限界が近いことを分かっていた。

だから次の一撃で全てが決まる。
そう確信していた。
『証明してみせろ、お前の可能性を！』
『お願い、絶対に帰って来て！』
二人のオペレーターの声が引き金となり三機が同時に動く。ストレイドは鮮やかな紫色のブレードを出しながら、残り少ないＡＰを刈り取ろうと唸る。ホワイト・グリントはアサルトアーマーで敵を破壊しようと高速で接近してくる。ステイシスはもうワンマガジンしかないライフルのトリガーを引きながら、自分に出来ることをしようと最後まで足掻く。
そして、規格外（イレギュラー）なリンクスたちはぶつかり合った。

『ネクスト、ホワイト・グリントの撃破を確認…馬鹿野郎が…』
『…ストレイド及びステイシスの撃破を確認しました』
オペレーターの報告が入る。しかしその声はもう届かないだろう。

結果は相討ち。ストレイドのブレードによりホワイト・グリントのＰＡが減少。アサルトアーマーが発動し周囲を飲み込んだが、最後に放ったステイシスのライフルによりホワイト・グリントはコアを撃ち抜かれた。
そしてクレイドルで最も優れたリンクスたちは誰一人生き残ることなくこの戦いは終わった。

こうしてとある世界で歴史に名を残すはずだった英雄達が死んだ。しかし彼らの魂は死して尚戦いの場に有り続けるだろう。彼らがそれを求める限り。
そしてそれはとある世界に引き継がれる。
―誰かの為に戦う
―誰かを救う為に戦う
―誰かを守る為に戦う

これはとある英雄たちの物語である。

第1話　相棒との訓練

「ここはどこだ？」
　ラキラが目覚めたのは浜辺だった。島には人の気配もなく、林があるくらいだ。辺りには何もなく何処までも広い海が見える。
「俺は死ななかったのか…」
　脳が上手く働かず記憶が曖昧な状態なラキラ。無理もないあれだけの戦闘だったのだ。多少なりとも体に負荷は掛かっているはずだ。
『それは違うな』
「!?」
　突如聞こえてきた男の声。しかしここにはラキラ意外の人影は見えない。気のせいかと思っていたが、次の一声で衝撃を受ける。
『おいおい自分の姿を見てみろよ』
　鏡なんて持っているはずがないので海を覗き自分の姿を確認する。
「なんだ、これ…」
　顔立ちや見た目はそのままだったが、その身には見慣れないものが装着されていた。体の所々に黒く鋭く尖っている機械的な物だが、一見するとＡＡＬＩＹＡＨのパーツに見えなくもない。
「なんなんだよこれ？」
『おいおい自分の愛機さえ分からなくなったのかよ？』
「何言ってるんだ？それにこれは一体…？」
『分かった、順を追って説明しよう』
　言われたことが理解できず混乱するラキラ。一度整理してから会話を再開した。
「まずお前は誰だ？」
『だからお前の愛機…ストレイドだよ。レイドで呼んでくれ。じゃないと長いから』
「分かった。そんで…俺は死んだのか？」
『あぁ、確かに死んだ。だからここにいる』
　信じたくはないがなんとなくは分かっていた答えが帰ってきた。しかし聞くことはまだあった。

「…次の質問だ。ここは何処だ？」
『お前のいた世界とは別な世界だ』
　恐らくこの時のラキラの顔は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしていただろう。自分に言われた言葉の意味を理解していなかった。
（ふざけているのか…）
『俺は至って真面目だぜ？』
　どうやらこちらの思考が相手にも伝わっているらしい。
『そもそも考えてみろよ。お前のいた世界はこんな海や空だったか？』
「……」
　落ち着いて辺りを見渡せば暖かい太陽の日差しに照らされ海が輝いて見え、空は綺麗な青が視界一面に広がっている。あの世界はコジマ汚染により海や空が汚染されていた。高空域なら汚染はされてはいなかったが時間の問題だっただろう。
「異世界何て夢物語かと思ってたんだけどな…」
『でも実際に起きている。認めるしかないだろうよ』
「まてよ、俺とお前は繋がってるわけだよな？ネクストとしては動けるのか？」
『勿論動ける。しかもコジマ粒子が無くても動けるようになっている』
「マジか！でも何でだろうな？」
『こちらの世界に適応したんじゃないか？あんな汚染物質こちらの世界に持ってくるわけにもいかないだろうし。無いなら無いで良いじゃねぇか、お前の体への負担が無くなるんだか　ら』
　そんなものかと考えていると腹の虫が盛大な音で鳴った。
「まずはこっちを何とかするか」
　この世界には魚はいるのだろうか？あちらの世界では水が汚染されろくに生物も生存出来るようなものではなかった。
『うん？腹が減ったならこれでも食っとけ』
　そう言うなりいきなりレイドが光ったと思ったらラキラの目の前にスティック型の栄養食が置かれる。

「おお、随分便利だな」
『これぐらいしか出せないけどな』
「しかしあっちでこれと似たようなの食ったことはあるけどあんまし旨く無かった気がするな…」
『要らないなら下げるぞ？』
「まてまて！食べるから！下げないでくださいお願いします！」
『お、おう』
　余りの必死な懇願に驚いたレイド。空腹には滅法弱いラキラだったからこその反応だったが余程耐え難いことなのだろう。
「んじゃ、いただきます」
　袋を開け一かじりしてみる。
「地味に旨いなこれ」
　程よいチョコ味が付いていて飽きることのなく食べることが出来た。

「取り敢えずこれからどうするか」
　空腹も満たされこれからを考えていくラキラ。しかし宛など何処にもない。完全な孤立状態だ。
『移動してみるしかないんじゃないか？』
「といっても現在地も分からないし…」
　妥当と言えば妥当だが方角すら分からない状態で目的地もな歩くのはキツイ。
『ちょっと待て、ここはハワイらしいな』
　ピピッと機械音を鳴らしながら現在地を答えるレイド。
「ハワイって何十年も前にあった場所じゃなかったっけ」
　セレンから聞いたことがあった記憶を頼りに思い出そうとするラキラ。
『それはそうだが、どうする？』
「取り敢えず動くしかないだろうな。ついでにお前の動きも確認した

いし」
　この世界のことはなにも分からない。少しでも情報が欲しいなら動くしかないだろう。それで誰かに出会えれば良い方だ。
『了解した』
　ラキラは立ち上がり海の方へ歩いていった。
「いつも通りにすれば動くんだな？」
『あぁ、それで問題ない。水に入ろうとすればオートブーストが発動するから心配するな』
　あちらの世界と変わらないなら何も問題はないと考えていたがそうはいかなかった。
「よし、じゃ行くか！」
　意気揚々と海に入っていったラキラだったがバランスがとれず盛大にコケてしまった。

「おい、いつも通りでいいんじゃなかったのか…」
『おかしいな…こんなはずじゃなかったんだが』
　そのせいで俺はがっつし水に濡れたわけだが、どうしてくれるんだ。
『仕方ない、海上を移動するための訓練でもするか』
「マジかよ…だるいわ。てかお前の方でジェネレーター動かせるんじゃねぇの？」
『確かにジェネレーターを動かすことはできるが問題はお前が移動できる姿勢でいられるかどうかだ。要するに体幹の問題だ。どうせコレといってやることもないだろう？それにいざというときの為にこういう基本行動は出来るようにしておいて損はない』
　真面目な答えが帰って来て驚いたわ。まぁ実際そうだしやっといた方がいいか
『やる気になったようでなによりだ』
　それから訓練をしたが立つことさえ時間がかかったのは言うまで

もないだろう。

―――――――――

「はぁ、はぁ」
『良く頑張ったな。飲み込みが結構早いじゃないか、やっぱ若いからか？』
「なにじじくさいこと言ってんだよ。俺はただセレンに鍛えられただけだ」
　実際セレンの訓練はキツかった。俺は生身での訓練なんてほとんど意味がないと思っていた。それはネクストで全てが片付くからだ。いくら体を鍛えてもＡＭＳ適性が上がる訳でもないし、体が負荷に強くなるわけではない。体力が付くというメリットはあるが。
「ったく、姿勢をとるだけでこんなに掛かるとは…」
『良いじゃないか、リンクスになったばかりの時を思い出すな。あの時はまだろくに動かせてなかったのにな』
「くっ…嫌なところを突いてくるなお前は」
　あぁ、セレンのスパルタ教育（物理）を思い出した…毎日毎日しごかれて死ぬかと思ったわ。
『乗るたびにゲッソリしてたからなお前』
「マジでキツかったわ。あんなん人にやらせるべきもんじゃないだろ」
　そんで本当に辛い時は優しくしてやる気を出させるとか飴と鞭の使い方が超上手かったからな。
『それでもやってたお前も大概だがな』
「あの世界で生き残るにはそれしかなかったんだから仕方ないだろ。それに俺はセレンの役に立ちたかったんだ」
　セレンには小さい頃から育てられた。なんの繋がりもない俺を優しく実の子のように。それに少しでも恩返しが出来れば良かったんだが…結局この様だからな、とんだ親不孝だよ。
『…マザコンかよ』

「何か言ったか？」
『別に』
　まぁ本人が言ってないんなら何も言ってないんだろう。
「じゃ、次はやっと海上移動の練習か」
『そうだな。一応言っとくがいきなり吹っ飛ばす様なことはするなよ？海面にヘッドスライディングしたくなかったらな』
　ご忠告ありがとよ。さすがに俺もそこまでバカじゃないとは思うんだが。
「といってもほとんどお前が操作出来るんだからお前の方で調整すれば良いんじゃないか？」
『通常時はそれでもいいが戦闘中なら俺がいちいちお前の状況を判断して調整するより、お前から直接伝えてくれた方が早い』
「そんなもんかねぇ」
『それに俺が調整するといってもさっきの姿勢に力が加わる訳だからそのまんまの姿勢だとコケるぞ』
　これまた時間が掛かりそうだ。しかし周りには海しかないのでこれが出来なければ話にならない。
『やった分だけ結果が付いてくる。当然だろ？』
「正論だな」
　ネクストの実戦でもそうだった。ＡＭＳの差は変えられなくても何度も戦場を渡り歩けば自ずと技術が身に付いていた。
「っしゃ！やってやるぜ！」
　さっきのような失敗は繰り返さないようにしないとな。
　そんなラキラの小さな誓いも顔面を海に打ち付けた音によってかき消された。

―――

「提督、敵艦隊を撃破したぞ。こちらの損害は、金剛、熊野が小破、最上、瑞鶴、加賀そして私は無傷だ」
　凛とした瞳に艶やかな黒髪をした女性―長門が先程の戦闘での被

害を報告する。彼女達はこの海域周辺で深海悽艦の目撃が相次いでいたので出撃していた。
『うーん…金剛、熊野はまだ行けるか？』
不安が混じった声で訪ねるのは恐らく男性の提督だろう。長門は二人に問いかける。
「この程度の傷どうってことないネー！」
「まだまだ行けますわよ」
「だそうだが？」
そんな二人の声を聞いて安心したのか幾分か和らいだ声で提督は伝える。もともと練度が高い彼女たちならこの程度の敵は問題ではない。提督の心配性といっておこう。
『なら進撃してくれ。金剛と熊野はくれぐれも無茶をしないように』
「あぁ、二人にもちゃんと言っておく」
といっても素直に聞くような二人じゃないだろうと思っている長門だったが言わないでおいた。
『それじゃ気をつけて』

「……」
いてぇ、顔面から行った…何でだ何でこうも上手くいかない…
『おーい生きてるか？』
海の中ってこんなに綺麗だったのか。おぉすげぇ色の魚が居たぞ。
「ブクブクブク」
やべ、息が出来ない。海の上だから手で起き上がることも出来ないしレイド何とかしてくれ。
『横に寝返りすればいいじゃねぇか』
それもそうかと思いよっこらせと寝返りを打つ。
『そういう頭の判断は遅いな』
「うるさいな、生身の状態で状態で海なんて来たことないしずっとネクストに乗ってたから感覚が分かんないんだよ」
『そこが問題なんだ。お前は俺に頼り過ぎだ。あっちの世界では確か

にお前は強かったがこっちの世界とは勝手が違う。そこを理解しないと死ぬぞ？』
『死』、という言葉が俺に重くのし掛かった。あまり気にしていなかったが、俺はホワイト・グリントと戦って敗れた。あの時は戦いに夢中になっていたが、一度『死』を経験してから分かった。やり直しなんてきかない、一度死んだらもう会えない。そんな当たり前のことが俺には堪えた。
「修正が必要だな」
　俺に必要なのは今の自分を見直すこととそれをどうするかという事だ。初心を忘れないとはよく言ったものだ。
『分かっているならそれでいい。俺もお前に死なれちゃ困るからな』
　心配するところはそこなのかと少し複雑な気分だった。。相棒なんだがらもう少しくらい気遣ってくれても良いんじゃないか？
「さぁ続けるか。まだまだやることはあるしな」
　気合いを入れ直し再び訓練に戻ろうとする。もう俺は死ねない。その為には少しでも動きに慣れる必要がある。ならやることは決まっていた。
『それじゃ少しずつ出力上げていくから上手く体勢を取れよ。緩い訓練じゃ遅いんだ、これくらいは着いてきてくれなきゃこまる』
「俺を誰だと思ってる？」
『…愚問だったか』
　なんとなくだがレイドと意思疏通が出来た気がして少し嬉しい気分だった。
『なら早速入るぞ。基礎の事だがいつもはコックピットに入っているから分かりにくいが高速で移動するということは空気の抵抗を大きく受けるということだ。俺はそんなもん関係無いように動いているがそれでも多少は受けている。それをお前自身で流さなきゃならない。体を縮めて受ける空気の面積を減らすことも出来るが戦闘中にそんなことはしていられない、だからお前がいかに流れを読むかだ』
　つまり体を上手く使って何とかしろってことか。生身での戦闘なんて銃を射ったくらいしかないからな。体術なら幾らか出来るが使

えるときが来るのかどうか…
「俺なりにやってみるから取り敢えず動かしてみてくれ」
『分かった。お前がやるって言うならいくらでも付き合ってやる』
レイドは中々の熱血系なのだろうか？何にしても俺の相棒（レイド）は良い奴だった。

「ふぅ、こんなもんか」
『それなりには慣れてきたようだな』
あれだけ失敗をしたのだ、上達するのも当たり前だ。心構えが変わったからという理由もあるかもしれないが。
「それでもまだまだあっちと比べると遅いけどな。お前の性能を引き出せれば良いんだけど上手くいかないなー」
さっきよりかは格段に移動速度は上がっているがそれでもあちらと比べるとまだ遅い。
「お前ってあっちと同じくらいの速さ出んの？」
『出来なくはないがお前がそれに着いてこれるかは知らないからな？』
おぉ、やっぱり優秀だったよ俺の相棒は。その分俺は劣っているように感じるが…
「何で俺の問題になるんだ？」
『あの速さでＱＢをした時Ｇが掛かるのは分かるな？前は機体がお前を守っていたが今はほとんど生身だ。所々俺の装甲が付いているが全部はカバーしきれない。それにまだ全力を出す必要もないだろう』
言われてみれば確かに。あれは中々キツかった。セレンからの教えがなかったらどうなっていたか…それに焦って怪我をしたら元も子もないもんな。
『まぁいい。今日はここまでにするか』
気がつけば太陽が海の向こうに沈んでいくところだった。海が日光を反射して輝いている。あっちの海も昔は綺麗だったのだろうか

？
「俺はまだいけるぞ？」
『焦るな。夜になったら視界が悪くなる。まだこの世界がどういうものか、何がいるのか分からないのに暗闇を歩くのはリスクが高い』
「お前にはレーダー付いてるだろう？ならそれで察知すれば良いじゃないか？」
『さっき言ったことを忘れたか？いくら事前に察知出来てもお前が反応できなければ意味がない。それに俺にばっか頼るなとも言っただろう』
　それもそうだった。先程自分の事を見つめ直したというのにもう忘れていたとは。自分で自分が情けなくなってくる。
『今日はもう休め。それなりのことはやったんだ今は体を休めて明日に備えろ』
「あぁ、そうするよ」
　島に戻り砂場で横になるラキラ。疲れが出てきたのか眠るのにそう時間は掛からなかった。

第2話　出会いそして想い

『おい起きろ！おい！』

何だよ、もう少し寝させてくれよ。昨日の訓練で疲れたんだからさぁ…。どうせ今日することも移動すること以外特に無いだろう。

てかやけに暑いな…今は夏か？太陽の日差しが強すぎて二度寝も出来そうにないな。

目覚めたばかりの体をほぐすため背伸びをする。眠気が覚めていき、瞳に日光が眩しく映る。

おぉ、朝日に照らされる海ってこんなに綺麗だったんだな。

『あちらの世界』と違ってこっちは雲ひとつない青空が広がっている。あっちは曇ってたり、晴れてたとしてもここまで綺麗な空じゃなかったしな。

と、そんなことを考えているうちにレイドが淡々と伝えてくる。

『この海域周辺に人型の生体反応を感知した。もしかしたらこの世界の住人に会えるかもしれないぞ？』

「…何？」

まさか探さずにして人が見つかるとは思わなかった。しかしこんな海のど真ん中に人なんて来るのだろうか？わざわざ船でこんなところにまで？

まぁそんなことはどうでもいい。この世界に来て初めて人に会えるんだ。この世界について色々と聴かなければならない。

それに誰もいないってだけで精神的には相当辛いものがある。話し相手もいないし、作業も一人でやらなければいけないからめんどいっちゃめんどい。一応レイドがいるが、人ってのは集団の中か同じ人種を求めてるのか、一人だと寂しくなったり不安になったりするもんだ。

「なら行ってみるか。探す手間も省けたし」

『……』

どうしたんだ？急にレイドが黙っちまった。さっきまで騒いでたってのに。あ、まだお前も眠かったのか。それで無理して起きたか

ら眠気がまだ抜けてないと。
『何を考えているかは大体察しがつくが、違うとだけ言っておくぞ』
おう、読まれてたよ。レイドと俺は今、文字通り一心同体だから考えてることがバレてしまう。全部を読まれるわけでもないが考え事をしているとき一々ツッコミをされるのは正直めんどい。
一人で考えたくてもレイドに伝わってしまうのだからなかなか落ち着いて考えることができないし。
「で、どうした？急に黙って？」
『いや、自分で言ったことだがこの辺に人が来るのかと思ってな…』
「それは俺も思ったけど、船でも来てるんじゃないか？」
『だったら大なり小なり船影が見えてもおかしくないはずだ。それなのに全く見えないんだ、おかしいとは思わないか？』
確かにレイドが言っていることは的を得ている。周りには海しかないのに何故生体反応が見つかったのか。
一瞬魚か何かと間違えたのかと思ったがレイドはさっき『人型』と言っていた。
ネクストのレーダー…というよりパーツの全ては各企業が他社より高い性能を持つものを作ろうと日夜研究に励んでいた。俺がある程度傭兵として名前が出るようになってからはいろんなパーツが企業から送られてきて一番しっくりときたものを選んでいた。もしこの世界に来てレイドのパーツがアセンブルしたままの状態だったら間違えるようなことはないだろう。
「結局直で確かめに行くしかないんだろう？だったらそんなことは何かあってから考えればいいじゃないか」
『…はぁ危機感というものがないのかお前は』
「それは一番お前が分かってると思うんだけど？」
『…否定はしないでおこう』
よし、そうとなれば善は急げだ。どこかに行ってしまう前に見つけなくてはあてもなくこの広い海をさまようことになってしまう。

「ここでいいのか？」
『あぁ、反応はこの周辺から感知した』
俺たちは今海の上で立ち往生をしている。というものレーダーから送られてきた情報を頼りにここまで来たのだが船どころか人影すらない。
まぁ、海に人影なんてあったら漂流者ってことになるんだがな。それはそれで対処に困る。
それで前述とおり立ち往生をしていたわけだ。てかどうするんだ、これでまた振り出しに戻ったぞ。
「んーこの世界に来るときに故障でもしたんじゃないか？あれだけ激しい戦闘だったし」
『無いとは言い切れんが、システムチェックをしたときはどこもおかしなところはなかったから問題はないと思うが…』
「でも実際に来てみて何もないんだしやっぱり壊れてるんじゃないか？」
『うむ……ん？』
「どうした？」
『反応が増えただと…！』
「えっ…」
『2…3…4…5。一気に増えたぞ！』
反射的に周囲を見回すがそれらしい影はやはりない。本格的に壊れてきたのだろうか？
まいったな、自分の機体だから整備班の人から調整の方法とか色々と教えてもらってはいたが、ここには機材もないし、レイドの姿も変わっているので果たして修理できるのかという問題もあるしなぁ。はぁ、どうしたもんかと考えていると…

……ゴポ
「…何の音だ」

『何か聞こえたのか？』
「しっ」
　耳を澄まし意識を集中する。海の上で棒立ちをしている状態など端から見れば自殺行為だが、俺はいつでも動けるように油断なく身構えている。
　…ゴポゴポ
　音がどんどん近づいてくる。聞き覚えの無いその音は俺の不安を掻き立てる。同時に本能が警鐘を鳴らす。それはいくつもの戦場を渡り歩いた末身についたものだった。
　ゴポゴポゴポ
　そしてさらに音が近づいてきたと同時に気づいた。海上には何もなく、上空にも渡り鳥と思われるものしかいない。そこからたどり着く答えは…
「下かっ！」
　本能的に察知した俺はなりふり構わず上昇。直後先程まで俺が立っていた海面が膨れ上がり—爆ぜた。
　巨大な水柱が立ち上がり一瞬視界が遮られるがそれもすぐに収まった。
「いや～危なかったな」
『まさか俺が気付けなかったことに反応するとはな…お前が相棒でよかったよ』
「はいはい、そういう話は後でな。今は『アレ』が何か分からないとどうしようもないぞ」
　俺の見下ろす先にあるのは魚のような形をしたものと人の形をした『なにか』だ。
　大きさ的には普通の魚と比べて圧倒的に大きいが、口と思わしき場所には、中から砲身のような何かが見える。さらにその目も生き物とは思えない光を放っており、一層不気味な雰囲気を醸し出している。
　人型の方は、体のラインだけ見れば女性に見えないこともないが、生きているのかと疑うほどに白い肌、最初から感情などなかったかのような顔立ち、何よりも頭についている謎の黒い物体。それには人の

頭など優に咥えられそうなほど巨大な口、その付近から伸びる白い触手が付いており、こんなもの生まれて一度も見たことがなかった。
「何なんだよ一体？『アレ』が人間だっていうのか？」
『流石に人間ではないだろうが、友好的な存在でもないらしいな。見てみろ奴ら俺たちに向かって殺気を向けてきてるぞ』

肌がピリピリと感じるほどその殺気は鋭かった。例えるなら自分の縄張りに入ってきた敵に対する殺意に近いだろう…多分。
「で、どうする？もしかしたらただ俺たちを警戒しているだけかもしれないぞ？」
『楽観視しすぎだ。しかしまぁ、よくそんな能天気な性格で生きてこれたな』
「うるせぇ。いつもそんなピリピリしてたらこっちがもたないわ。メリハリがあるといえメリハリが」
その時、海中に一際巨大な影が見えた。ゆっくりと海上に現れる姿は、まるでこの海の支配者とでもいうような、そんな風に感じるものだった。
その姿はやはり異形と呼ぶにふさわしいものだった。人型の『なにか』は先ほどのものと似ているがその隣にいる『怪物』はあまりにも大きすぎた。異常に発達した腕、巨大な砲身が両肩にあり、人型の倍以上の身長はあると思われるそれは、忠犬のように人型の側に鎮座していた。
「これまた大物のご登場か」
『どうする、殺られる前に殺るか？』
「いや待て、一度コンタクトをとってみよう。それからでも間に合うはずだ」
『そうか、お前がそう言うなら好きにしろ』
なんだ、やけに大人しく引き下がったな。もうちょっとうるさく言ってくると思っていたんだが。まぁいいか。あいつが信用してくれてるってことにしよう。
と言っても誰に聞けばいいか…最後に浮かんできた奴に聞いてみ

るか。リーダーぽいし。
「なぁ、あんたらこの世界の住民か？ちょっと聞きたいことがあるんだが」
「……」
　無視られたよ。あれか、俺の顔がそんなに無愛想だったか。それなりには社交的な感じを出している自信はあったんだが…。てか無言の威圧ってやつかな、すげーキツイ。
　あっちは敵意丸出しなのにこっちがこんな間抜けなことを聞いてるのが気に食わなかったのだろうか。
「…コンナモノマデ作ッテイタトハナ」
　やっと喋ってくれた。しかしその口調は忌々しいものを見たような口調で、自分に言われたと理解するのに数秒かかってしまった。
　なんでそんな吐き捨てるようにいうかな～、困ってる人を見たら助けてくれよ。セレンも人助けはいい事だって言ってたぞ。
「所詮、正義ダ何ダト言ッテ自分タチノ保身シカ考エナイ屑ドモカ」
「えぇ…」
　いきなり『こんなもの』扱いされてその次は『屑』って言われたよ。泣くぞ俺？肉体的ダメージなら何とでもなるけど精神的なダメージは心にくるからやめてほしい。割と切実に。
「…帰レ」
「ん？」
「…帰レト言ッテイル」
　いや、帰るあてなんてないんですけど…。あったらこんな事聞かないし、即効で飛んでいきますけど。しかしまぁこの感じからするとあまり関わりたくないような、嫌われてるようなそんな感じがした。
　俺なんかしたっけ？縄張りを荒らしたなら謝って出て行くからとりあえず陸地の方向を教えてもらいたいもんだ。
　そんなことを考えていたので間が少し出来てしまったのだがこの沈黙がまずかったらしい。
「私タチヲ沈メニキタノカ…？」
「？」

「オ前エモ奴ラト同ジヨウニタダ敵トイウダケデ、戦ウ意思ノ無イモノヲ追イヤリ、沈メテイクノカ…！」
瞬間、目の前の『なにか』からの殺気が一際強くなり、後ろにいた『怪物』が砲身をこちらに向ける。それに釣られて最初に出てきた奴らもこちらに各々の武装を向けてくる。
どういうことだ？敵？奴ら？いまいちピンと来ない。言葉から察するに戦争かそれに近い何かがこの世界では起きているのだろう。
しかし俺はつい先日この世界に来たばかりだ。いきなりそんなことを言われてもわからない。なので説得を試みてみようとする。
「帰ラナイトユウナラココデ沈ンデユケ…安心シロ楽ニ沈メテヤル」
「ちょっと待ってくれ！俺はあんたらとやりあう気はない。ただ俺は道に迷ってるだけなんだよ！」
苦し紛れに出たような言葉だが嘘は言っていない。俺がどうしてこんな場所にいるのか、自分がこの世界に来る前の出来事やこの世界に来たばかりで帰るあてがないことを話した。
「…ソンナコトヲ信ジルトデモ？」
帰ってきた反応は予想通りだった。いきなり目の前に現れた外敵が、「この世界とは違う世界から来た」なんて言ったり、「こんなにも綺麗な海はなかった」などと言っても信じてくれるわけがなかった。
当たり前か。こんなこと言ってる自分でも信じないだろうからな多分。
「言イ残シタコトハソレデ全部カ？」
どうやら和平は無理なようだ。こうなったら殺るしかないとこちらも身構えようとしたが――
『なるほど、そういうことか』
「？」
さっきまで黙っていたレイドがいきなり喋りだした。おう、いきなり声出すのやめーや。ひびってまうやろ。ほら目の前の『なにか』も驚いて困惑してるぞ。
しかしなにがなるほどなのか。さっきの会話で分かることなんてあったか？強いて言うなら戦争が起きてることくらいだぞ？

「何処カラダ？コノ声ハ？」
『おっとご紹介が遅れてしまって申し訳ないな、俺はお前らの目の前に居るやつの装備、お前らの所で言う『艤装』に宿っている者だ』
「艤装ニ？」
『あぁ。しかしこの世界では『艦娘』と『深海悽艦』、どちらにも艤装に宿るなんてことはないようだな。信じられないと思うがさっきいった通り俺たちは別世界から来たんだ。それで色々と聞くために人を探してたときに…』
「私タチニ出会ッタ…ソウイウコトカ？」
『話が早くて助かる』
　え、なに？艦娘？深海悽艦？何のこっちゃい。全く聞いたことがないぞそんな言葉。
　てかなんでお前がそんなこと知ってるんですかね？
「おい、どっからその情報を仕入れた？」
『この世界のネットワークに侵入したんだよ。そこから世界情勢を見てみたんだがお前の予想通りこの世界では戦争が起きている。といっても人間同士じゃない、『深海悽艦』といういきなり海から現れ宣戦布告してきた未知の勢力だ。それから深海悽艦はシーレーンを破壊。各国の連携を弱体化させた。しかし同時に過去の軍艦の魂と名を継いだ存在『艦娘』が現れた。それによりほとんどの兵器が効かなかった深海悽艦に対抗できる存在が生まれたわけだ』
「長い、三行」
『取り敢えず平和な世界に未知の敵対勢力登場
　戦争が始まるがこちらの兵器が効かない
　唯一の希望の登場、これで勝つる
　以上』
「長かった気がするけど何となく分かったので良しとします」
『ったく、お前は何様だ…それと艦娘と深海悽艦に関する情報だ、一応目を通しておけ』
　ふむふむ、まぁ何となくは把握した。この世界で過去に起きた戦争で存在した過去の軍艦が生まれ変わった姿ね～。てか、こんな可愛

い女の子が昔軍艦で、命張って戦うって世も末だな。
　てか、あれ？ネットワークに侵入した？だったら人探す必要無かったんじゃね？
「お前、そんなことが出来るんだったら人探す必要なかっただろ」
『お前が任せろって言って暇だったから色々と自分の機能を確認してたら出来たんだよ。最初から分かってたらこんな回りくどいやり方をするわけないだろ』
「それもそうだな…」
　うん、正論だからなんも言えねぇ。でもさぁ、文句の1つは言いたくなるじゃん。こんなめんどくさいことになってるんだしさぁ。
『知らん』
「ひでぇ」
「…話ハ終ワッタカ」
　あ、ごめん。除け者にしてたね。悪気はなかったんだよ？ただこいつ（レイド）がいきなり訳わかんないこと言うからなんだ。俺は戦うつもりだったんだよ、もうこれしかないって。で、始まるって時にこいつがねぇ。
『なに人のせいにしようとしてるんだお前は』
「なんのことでしょうか。俺にはさっぱり」
「オイ、聞イテイルノカ！」
　やべ、ついにキレた。またこいつが余計なことを言うから。まぁ俺にも非があるのは自覚してるけどな。にしても殺気がさっきより増してるな。これは本格的にまずいか？
「ソレデ？マタソンナデッチ上ゲタ事ヲ信ジルトデモ？」
「ほらやっぱりな。結局殺るしかないだろう？」
『それはどうだろうな？』
　この期に及んでまだ何か言うつもりか…何でそんなにペラペラ喋れるんだろうね。俺がコミュ障なだけか？機械に負けるとか…それも殺しの道具にしか使われてない最強の兵器に。
　うわっ…俺のコミュ力、低すぎ…？
（馬鹿なことは後で考えてろ、いいな？）

（アッハイ）

「ドウイウコトダ？」

『お前らが艦娘と敵対していることはお前の感情や言葉から見ても明らかだ』

「ソウダ貴様ラハ――「だが問題はそこじゃない」

『問題は、何故俺らをすぐに攻撃しなかったのか、ということだ』

「…」

『そんなに憎いならすぐさま攻撃すればいいだろうに。それにお前は『帰れ』といった。つまり戦えない理由があるということ違うか？』

おぉ、何か名推理をしてる探偵みたいな流れになってる。こいつこんなに頭回るんだな～。戦闘以外できないと思ってたんだが。

にしても言われてみれば確かにって思うシーンが何回もあったな。あんなに殺気を向けてたのに攻撃してきたのは最初の何かの爆発くらいだしな。

「それにお前はこうも言っていた『戦う意思のないもの』と。それは自分たちのことじゃなかったのか？」

「ッ！」

「多方何度も繰り広げられる戦争が嫌になったか、静かに暮らしたくなったんじゃないか？」

目の前の深海悽艦――《戦艦棲姫》はレイドの言葉に所々反応しているが今は黙って聞いている。後ろにいる奴らもそれに従ってか黙って聞いている。

組織としては整っているのかもしれないが、それでも全部の個体をまとめるのは難しいのだろうか。何体かは困ったように視線をさまよわせている。

「だから誰も傷つかないように帰ることをうながが「ソレ以上ハ言ワナクテイイ…」

「…オマエノ言ッタ通リダ。私タチハ戦ウコトガ苦手ダッタ。戦ウタメニ生マレタ存在ダトイウノニナ」

自らを自嘲するように言葉を並べていく戦艦棲姫。しかしその表

情は言葉とは裏腹に後悔など無いような清々しい顔に見えた。
「最初ノ頃ハ私モコノ戦争ニ参加シテイタ。シカシ戦ウ内ニ思ッテキタ事ガアッタ。コノ戦争ニ意味ハ有ルノカト?。
私ハタダ仲間ト静カニ暮ラシテイケレバソレデ良カッタ。ダカラ本隊カラ離レ、同ジ考エヲモッタ仲間ト共ニコノ海域ニ移リ住ンデイタ」
「…」
『…』
「ダカラ私ハコノ子達ヲ守ル義務ガアル。ソノ為ナラ自分ガ沈ムトシテモ私ハソレヲタメラワナイ。ダカラココデ貴様ラヲ沈メルッ!」
あっ、そういえば戦う直前にこいつが割り込んできてたからそういう流れだったのすっかり忘れてた…
てかさっきから何回も言ってるんだけど全然聞く耳を持ってくれないな、コミュ症の俺にはキツイ仕事だったようだ…
「だーかーらー!俺は艦娘じゃないって言ってるだろ!それに艦娘は皆女の子だろ?だったらどう見ても男の俺が艦娘だってのはおかしいだろ!?」
「確カニ艦娘ハ女ダ。シカシ人間ガ艦娘トハ違ウ、我々ニ対抗デキル兵器ヲ作ッテイタラ?」
「…」
俺は何も言い返すことができなかった。いくら俺が弁明したところで敵である人間の言葉など、真面目に受ける奴なんて居ないだろう。そんなことをして後ろからやられれば笑い話にもならない。
故にこの深海棲艦の言っていることは正しい。仲間を守りたいなら尚更慎重にならなければ取り返しのつかないことになってしまう。
「無駄話モココマデダ。貴様ラヲ海ノ底へ―」
戦艦棲姫の言葉はそこで途切れた。何故なら―
「!?」

戦艦棲姫の傍にいた帽子のような何かをかぶってる人型――《ヲ級》がいきなり爆発したからだ。
「!?」
俺も含め誰もが唖然としている中爆発をしたヲ級は、衝撃で倒れていた。
「大丈夫カッ!?ヲ級!」
「マダ…ダイ…ジョウブ」
ヲ級は、頭の艤装と思われるものから火を出しながら苦痛に耐えているようだった。艤装は跡形もないくらいに破壊され、血も流れている。よく沈まずにいられたと思うほどだ。
「ッ!全艦回避!」
続けざまに海面で巨大な水柱が立ち、深海棲艦たちにさらなる混乱が生まれる。リーダーが混乱している者たちを指揮している状況を見てようやく俺はこれが『戦闘』だということに気づいた。
「いきなりかよっ!ったくどうしろってんだ一体!」
『落ち着け、昨日やったことを思い出せ。こういう時に焦ったらそれこそどうしようもなくなるぞ』
俺とは対照的に落ち着いているレイドの言葉を聞いてようやく落ち着いてきた。しかしその間にも眼下で繰り広げられる『戦闘』は続いていた。
深海棲艦たちは態勢を立て直し、反撃に出ていた。しかしその動きはとても満足に動けているようには見えず近くに砲撃が飛んでくるたびその動きは止まっていた。
さらに独特のプロペラ音と共に近づいてきたのは見たこともない機体だった。大きさは何かの模型と見間違うほどの大きさだ。しかしその下に抱えている魚雷や爆弾を見て兵器だということに気付く。
「チィッ!忌々シイ艦娘ドモガッ!」
対空迎撃が行われるが思うように命中せず落とせたのは4分の1程度だ。迎撃をくぐり抜けた機体は目の前の深海棲艦に目掛けそれぞれの獲物を落とす。
それがまた混乱を生み、陣形が崩れる。そしてそれに連鎖するよう

に被害が増えていく。
「これがこの世界の戦闘…」
『そうだ。人類と深海棲艦。両方の存続をかけた戦い。これがこの世界の戦闘だ』
俺はいくつもの戦いを経験し、見てきたというのに目の前で行われている戦闘に目を奪われ同時に何とも言えない気持ちになっていた。ネクスト同士の戦いとは比べ物にならないほど貧弱で、到底及ばないはずなのにずっと目を奪われたままだ。
俺は咄嗟に動くことができなかった。この状況だけ見れば深海棲艦側を助けても問題はない。しかしそれはあくまで今の状況だ。アイツ等は人類の敵で今も戦争を続けている。そんな相手を助けてしまったら俺は人類の敵になってしまう。人類からも深海棲艦からも狙われる身に。
その場の勢いで助けに行くのは簡単だ。しかしそのあとは一体どうする？確かに艦娘たちは不意打ちとも言える行為を行ってきた。少なからず俺はそれに対して不快な気持ちが表れた。でもそれは数で劣る自分たちが勝つために選んだ方法だ。ましてや今は戦争中。卑怯やなんだと言われても結局は勝たなくてはいけない。人類はそうして今まで生きてきたのだろう。
もしかしたらあの深海棲艦はそんな人間のやり方に耐え切れなくなってきたのではないだろうか？それで離れて暮らしてたってのに望んでもいない戦争がまた始まってしまった。今もアイツは仲間を守るために必死に戦っている。自分にどれだけの被害が出ようと仲間を守るために一歩も引いていない。どれだけ傷つこうと歯を食いしばって必死に耐えている。
アイツはなんて言った？たとえ自分が沈むとしても仲間が守れるならためらわないと言った。しかしそれではダメだ。少なくともその周りにいた深海棲艦たちはアイツを必要としている。ならばアイツはそのために生きなければならない。それがリーダーとしてのアイツの役目だ。
それに、大切な仲間が死んだら残ったやつらはどうするんだよ…。

お前がいたから皆生きてこれたんじゃないのか、お前のその強い思いに皆が答えようとしたんじゃないのか。
ならアイツを死なせてはいけない。アイツが死んじまったら必死に頑張ってきたことが全て無駄になってしまう。それだけはダメだ絶対に。
それに…

大切な存在が遠くに行っちまうのは寂しいからな…
『お前…』
「正直まだ迷ってる部分はある。殺しをしてきた俺がこんな自己満足な事をしてもいいのかって思ってもいる。だけど俺は…」
『いいじゃないかそれで』
「え…」
てっきり反対されるのかと思っていた俺はレイドの即答に面食らってしまった。レイドには何の利益もないことは分かっている筈なのに、どうしてそこまではっきりと言い切れたのか俺には分からなかった。
『別に殺しをしてきたからって人を助けることなんてって、考えるのはおかしいだろ？前の世界でもその殺しをしたことで結果、人助けをしていたことには変わらないんだからな。それに―』
少し間をおいてから聞こえてきた声は、母親が子供を優しく包むようなそんな柔らかい声が聞こえてきた。
『セレンも言ってただろう。お前が道を選べって。俺もセレンと同じようにお前についていくさ』
「そうか…ありがとう」
まったく、本当に俺は最高の相棒を持ったよ…。
「つくづく思い知らされるな。俺がどれだけお前に助けられてきたのか」

あの世界で俺はいつも無茶ばかりしてきた。時にはＡＰが０になりかけた時だってあった。時には腕や足が破損してしまった時もあった。でもあの時の俺は目の前のことしか見えていなかった。生きるため。戦うため。セレンのため。そんなことしか考えていなかった。

でもやっと分かった。お前がどれだけ頑張ってきてくれたか。俺の我が儘に付き合ってきてくれたのかが。

お前はいつも文句一つ言わずいつも俺の傍にいてくれた。兵器だから言葉なんて話すはずがない。そんなことは分かっている。でもこいつは、いつも俺の全力に答えてくれた。それこそ機体のトラブルが起きてもおかしくないほどに使っても。いつも万全の状態でいてくれた。

兵器にだって魂は宿る。誰だってそんなことは分からないだろう。でも俺は気づくことができたんだ。こいつが見守ってくれてたことに。俺がこいつにどれだけ支えられていたのかも。

「なら、答えてみせるさ…」

世界が変わったって俺のやることは変わらない。戦うことしか能がないんだ、それ以外に何ができるという。せめてセレンにもう一度会えた時に自信を持って言えるような生き方をしよう。

「お前の我が儘に！」

それが俺にできることだ。

第3話　決意

私ハ、人間ガ嫌イトイウワケデハナカッタ。深海デ目ヲ覚マシタ時カラ奴ラニ対スル憎悪トイウ感情ハ少カラズアッタガソレモ日二日二薄レテイッタ。ソレドコロカ私ノ中ニ生マレテキタノハ、争ウコトナクコノ戦争ヲ終ワラセタイトイウ気持チダッタ。

シカシ私ハ仲間タチニソノ気持チヲ打チ明ケラレナカッタ。私タチノ体ニ植エ付ケラレテイル「人間ヤ艦娘タチハ敵」トイウ思考ガ、到底私ノ考エナド理解スルハズモナイト思ッテイタカラダ。私ハソウシテ毎日ヲ過ゴシテイッタ。

ダガ胸ニ抱エタ事ヲ誰ニモ話セナイトイウノハ辛ク、ソレニ耐ラレナクナッタ私ハ仲間ニ打チ明ケルコトニシタ。深海棲艦トイウ枠組ミノ中デ見レバ私ハ異端者ダ。ダガソレデモ私ハ知リタカッタ、コノ戦争ノ意味ヲ、ソノ先ニ何ガアルノカ。

艦娘タチトノ戦闘ガ終ワリ深海棲艦ノ皆ガ休憩シテイルトキ私ハトアル一人ニ声ヲカケタ。多大ナ消耗ヲ強イラレル戦闘ノ後ノ休息ハ私タチノ唯一ノ休メル時間ダッタ。

「装甲空母姫、少シ話ガアル」

「アラァ、貴女カラ話シカケテクルナンテ珍シイジャナイ。一体ドウシタノ？」

「オ前個人トイウヨリハ皆ニ話ガアルノダガナ」

「本当ニ珍シイワネ、貴女ガソンナニ話シタイコトガアルナンテ」

コノ時前線デ指揮ヲ執ッテイタノハ、装甲空母姫トモウ二人ノ姫級ダッタ。私ノ方ガ戦歴ハ長カッタガ、生憎イニクコノヨウナ性格シテイタノデ私ハ他ノ姫級タチニ任セテイタ。ソノ中デモ装甲空母姫ハ一番ノ長イ付キ合イダ。私ト違ッテ物腰ガ柔ラカク、部下ト楽シソウニ会話ヲシテイルノヲヨク見カケル。ソンナ性格ノセイカ部下カラモ頼リニサレ信頼モ厚イ。ソンナ奴ダカラコソ私ハ自分ノ気持チヲ

話スコトガデキタノダト思ウ。
「デ、何カシラァ話シッテ？」
「私ハ……」
　言葉ガウマク出テ来ナイ。話ス事ハモウ決マッテイルトイウノニドコカ躊躇ッテイル自分ガイタ。大丈夫ダ、落チ着ケ。イツモ通リニ話セバイイ、ト自分ニ言イ聞カセテイテモ中々出デテコナイ。
　マダ私ハ捨テキレテイナイノカ…人間ニ対スル憎シミヲ。ドンナニ変エヨウト思ッテモ変エルコトハ出来ナイノカ…

　……イヤ、マダ何モ始マッテイナイ。ナラバ抗ッテミヨウデハナイカ、コノ呪ワレタ運命ニ。諦メルノワ抗ッテカラニスルベキダ。今諦メルノハ早スギルカラナ。
「私ハ……コノ部隊カラ外レル。ソシテココカラ遠イ海域ニ移リ住ム」
　私ガ部隊カラ外レルト言ッタ途端ニ回リニ居タ深海悽艦タチガ静カニナッタ。無理モナイカ、イキナリ姫級ノ私ガ前線カラ離レルトナレバ戦力的ニ大キナ打撃ヲ受ケルダロウカラナ。
　ソウダトシテモ私ハ自分デ決メタ道ヲ歩クツモリダ。誰ガ何ト言オウトナ。ソウデモシナケレバコノ戦争ハイツマデモ泥沼ニハマッタママダ。
「……本気ナノ？」
「アァ、ソウダ。コノ意志ヲ曲ゲルツモリハ無イ」
「理由ヲ聞カセテモラッテモイイカシラ？」
「私ハ、コノ戦争ノ意味ハアルノカト最近ニナッテ思イ始メテキタ。ソシテソノ想イハ日ニ日ニ強クナリ、イツシカコノ戦争ヲ終ワラセタイト想イニ変ワッテイッタ。
　シカシ我々ノ中ニハ人間ニ対スル負ノ感情ガアル。ソレハ消ソウト思ッテモ消セナイイワバ『呪イ』ダ。私トテ戦ウ気ハ無イト思ッテイテモ心ノドコカニハ『殺セ』『沈メロ』ト私ニ訴エカケテクルモウ一

人ノ私ガイル」
「…ソウヤッテイツモ過ゴシテキタノネ、貴女ハ」
「アァ。シカシ私ハコンナ呪イノセイデ仲間ガ沈ンデイクノヲモウ見タクハナイノダ。私タチモイクツモノ艦娘ヲ沈メタガ奴ラニモ私タチノ様ニ仲間ガイル。互イニ殺シアッテ仲間ガ沈ミ悲シム。ソレナノニマタ戦イハ始マリ悲シミヤ復讐ノ連鎖シカ続カナイ。コンナ悲シミシカ残ラナイ事ヲ私ハ止メタインダ」
　イツノ間ニカ話シ始メタ時ヨリモ周リニイル深海棲艦ノ数ハ増エテイタ。皆沈黙ヲ貫イテイタガソノ表情ハ、困惑、悲愴、呆レ、理解出来ナイトイッタ表情ダッタ。アル程度ノ予想ハ出来テイタ、自分ノ考エガ受ケイラレル物デハ無イコトハ。
　同時ニコノ戦争デ沈ンダイッタ仲間タチヲ侮辱シテイルコトモ。仲間タチハ、文字通リ命ヲ懸ケテ戦ッテイタ、ソレヲ悲シミシカ生マレズ、馬鹿ゲタ話ナドト思ッテイル私コソ馬鹿ト言ッテイイ。仲間タチガ戦ッタカラコソ私タチハ今ヲ生キテイラレルノダ。ダカラコソ私ハ皆ノ死ヲ無駄ニシナイヨウニシタイ。
　ソレハ装甲空母姫モ私トハ別ノ意味デ思ッテイルダロウ。仲間ノ死骸ヲ踏ミ越エテデモコノ戦争ニ勝トウト。ソレコソ沈ンデイッタ仲間タチヘノ手向ケニナルト。
「私タチハ人間トハ生マレモ違ウ、外見モ全ク一緒トハ言エナイ、ダガ私タチハ人間ト同ジヨウニ考エルコトモ、喋ル事モ、仲間ト一緒ニ喜ビ合ウコトダッテデキル。ソコニ違イナド殆ドナイ。ダカラ私ハ信ジタイ、戦争ナドセズ仲間モ沈ムコトナク平和ニ過ゴセル未来ヲ」
　ソコデ私ハ言葉ヲ一度切リ周囲ヲ見渡ス。誰一人トシテ口出シスルコトナク聞イテクレテイルコトニ感謝シ次ノ言葉ヲ続ケル。
「モシ私ト同ジヨウナ思想ヲ持ッテイル者、戦ウコトニ迷イガアル者ハ付イテキテホシイ。無論無理ニトハ言ワナイ。私ハ深海棲艦トイウ生物ノ本質カラ離レタ事ヲシテイル異端者ダ。ソレニハ大キナリスクガツクダロウ。コノママ此処ニイタホウガ良カッタト思ウカモシレナイ。
　ダガソレデモコノ戦争ヲ止メタイトイウ意志ガアル者ハ付イテキ

テホシイ」
「……」
　私ノ話ヲ聞イテイタ者タチハヤハリ困惑ヤ迷イトイッタ表情ヲシテイル。シカシソレモ無理ハ無イ。私タチトイウ存在ハ極論デ言エバ戦ウ為ニ生マレテキタノダ。ソレヲ止メテ今マデ敵同士ダッタ者タチト和平スルナド正気ノ沙汰デハナイ。
「……ソレガ貴女ノ願イナラ私ガトヤカク言ウ権利ハナイワヨォ。貴女ガソウ思ッタナラ好キニスレバイインジャナァイ？」
「止メナイノカ？」
「逆ニ聞クケド止メテ欲シイノ？マァ、止メテモ無駄ダッテワカッテルシネェ」
「スマナイ。迷惑ヲカケル」
「謝ラレルヨウナ事ヲシタ覚エハナイワヨォ？デモ代ワリト言ッテハナンダケド、モシ私タチノ邪魔ヲショウトシタラ容赦シナイカラソコノ所ハ忘レナイデネ～」
「ソウナラナイヨウニスルノガ私ノコレカラノ仕事ダ」
「私モ知リ合イトヤリアウノハ勘弁ダワァ～」
　オ互イ軽口ヲ叩キナガラ話シテイルト不思議ト心ガ和ンデクル。サッキマデ悩ンデイタコトガ嘘ノヨウニ晴レテイクノガ自分デモ分カッタ。口下手ナ私デモココマデ話シ易イトイウノハ驚キダガ、奴ノコンナ所ガ部下カラ信用サレル理由ナノダロウ。
「ソレデェ？誰カコノ中ニツイテイク子ハイルカシラァ？」
「……」
　誰モ即座ニハデヨウトシナカッタ。イヤ、デヨウトシナカッタノデハナク元々デル気ガ無カッタノカモシレナイ。
　私ハ何処カデ私ト同ジヨウナ思想ヲ持ッテイル者ガイルト思ッテイタ。ダガソレハ独リ善ガリニ過ギナカッタノダロウ。
「ソウカ、ナラ―「私モイク」」
　皆ノ視線ガ一点ニ集中スル。何十人モノ視線ヲ平然ト受ケ止メテイルノハ、頭ニ付イタ艤装ガ特徴的ナ『ヲ級』ダッタ。
　皆ガ驚愕ノ表情ヲシテイルノヲ尻目ニ、ヲ級ハ言葉ヲ続ケタ。

「姫ニハ今マデ助ケテモラッタ恩ガアル。ダカラソレヲ返ソウト思ッタダケ」
「ヲ級……」
「私モゴ一緒サセテイタダケマスカ？」
　ソウ言ッテ輪ノ中カラデテキタノハ艶ヤカナ黒髪ヲ腰ノ辺リマデ伸バシテイル『ル級』ダッタ。ソノ言葉遣イト相マッテヨリ大人ビタ雰囲気ヲ醸シ出シテイル彼女モマタ私ノ古イ付キ合イデモアル。
「シカシ主力級ノオ前ガ抜ケテハ…」
「ソレハ姫様モ一緒デショウ？ダカラ別ニ問題ハアリマセン。ソレニ空母姫様モ仰ッテタジャアリマセンカ、好キニスレバイイ、トダガラ私モソウシマス」
　ソレカラ、私モ、自分モト次々ト名乗リヲ上ゲ、ソノ人数ハ３０ヲ超エテシマッタ。
　……私ガ何ヲシヨウトシテルノカ分カッテイルノカ？思ワズ口ニ出ソウニナッタガナントカ中二留メル。表情モイツモドオリノママニシ、悟ラレナイヨウニスル。コレデ悟ラレルヨウナコトハナイダロウ。…多分
「アラアラァ、ソンナ顔シチャッテソンナニ意外ダッタノ？アノコタチガ付イテクルノガ？」
　小声デ装甲空母姫ガカラカウヨウニ私ニ聞イテクル。ソンナニ分カリ易イ顔ヲシテイタダロウカ？隠シテイルツモリダッタガドウヤラコイツニハ筒抜ケラシイ。
　シカシソノ問二関シテハ正直予想外ト言ッテヨカッタ。マサカコレホドノ人数ガ付イテクルトハ思イモシナカッタ。精々十人程度ダト思ッテイタノダガ何故コンナニモ集マッテシマッタノカ…
「ソンナ二不思議ナ事カシラネェ。貴女ガ思ッテイル以上二大切ナ存在ナノヨ、アノコタチニトッテハ」
「私ガカ？ソンナ大シタコトモシテイナイ私ガ？」
「貴女二トッテハ当タリ前ノコトナンデショウケド、アノコタチカラシタラソレハ違ッタコトナンデショウネ。ダカラコソコウヤッテ集マッテクレテルンジャナイ」

マサカソンナ風ニ思ワレテイタトハナ。シカシソレホドノ事ヲシタ実感ガナイノダカラ、イザ言ワレテモイマイチ分カラナイ。

…マァ、仲間ハ多ケレバ心強イシ何ヨリコノコタチノ思イモ無下ニハデキナイ。自分ヲ信ジテ付イテキテクレルコノ子達ノタメニ全力ヲ尽クソウ。何ガアッテモ皆ヲ守レルヨウニ。

「ナラバソノ信頼ニ答エラレルヨウニナラナケレバナ」

「期待シテルワヨォ？」

ヤッテミセルサ絶対。コノ戦争ヲ終ワラセルタメニ。

第４話　理想

それから数日が経ちその間に私たちはこの海域を出る準備をしていた。準備といってもそんな大層なものでもなく、一応の武装とこれからの計画といった簡単なものだった。無論考えるのは簡単だがそれを成すのは困難だろう。

それでも私はやらなくてはならない。それが今まで散っていった仲間の手向けになると信じているから。

「ソレデハナ、私タチガイナクナッテモオ前ガ皆ヲ守ッテクレ」

「勿論任セナサイナ、貴女タチガイナクテモヤッテミセルワ」

しかしそうは言ってもこれほどの規模が空くとなると戦力が乏しくなるのは否めない。だがそれでも装甲空母姫はやってみせると言った。

ならばそれを信じよう。こいつは口だけではないと私がよく知っている。

「タダ……ヤッパリ寂シクナルワネ」

「何ダ、オ前ガソンナ顔ヲスルナド珍シイナ？」

「皆家族ミタイナモノダカラカシラネ、離レ離レニナルノハ寂シイワネェ」

いつも気さくに皆と離している姿からは想像できないほどの弱音を吐いたことに驚いたがむしろ皆のことを思っているから普段からあのように接しているのだろう。

ただ…

「少シ違ウナ」

「？」

「ミタイナモノデハナイ、私タチハ家族ダ。何処ニイヨウトソレハ変ワラナイ」

そう私たちは家族だ。今までもこれからもどんなことが有ろうと私たちはずっと？がっている。

「フフッ、貴女ラシイ考エ方ネ。デモ私ハ言ッタ筈ヨ？邪魔ヲスルナラ容赦ハシナイッテ」

「ソンナ事態ニシナイ様ニスルノガ私ノ仕事ダ。ナニ、心配スル必要ハナイ、絶対ニ成シ遂ゲテミセル」
「エェ、期待シテイルワ」
　互いに自分たちが成すことを考え最善を尽くす。それが私と装甲空母姫が誓ったことだ。こいつは私とは違う考えを持っているが仲間のことを想っていることは同じだ。そんなやつだからこそ私は信用できた、これからのことを託すことができた。
　たとえ私がいなくなろうともこいつなら私と同じような道を歩んでくれるのではないかと。そんな信用とも期待とも言えぬ感情が私の中にはあった。

「ヨシ、ココダ」
　今までいた海域を離れここまで来るのに丸二日掛かった。普通に移動すればこんなに時間はかからないがこれほどの人数で移動しようとなると艦娘に見つかる可能性があった。
　だからできるだけ早く動きながらも細心の注意を払いながら移動していたのでここまで時間がかかってしまった。
「数分ノ休憩ノ後荷ホドキヲ始メル、クレグレモ艦娘タチニ感知サレナイ様ニ気ヲツケロ」
「了解」
　しかし目的地に着いたからと言って油断をしてはならない。数人を見張りに行かせ他の者たちも最低限の警戒だけはしておく。なるべく戦闘を避けなければ私が目指したものが壊れてしまう。
　さすがに行ってくるといってたった数日で戻るなどバカバカしいにもほどがある。
「……頃合イカ、皆一度集マッテクレ」
　ある程度作業が終わったのを見計らって皆を呼ぶ。たったこれだけの言葉ですぐに手を止め私の元へ来てくれるのは頼もしさすら感じる。

「部隊ト別レテ二日ガ経ッタガ改メテ皆二訊キタイ。今コノ場デ戻リタイトウ者ハイナイカ？」
　私からの問いに答えるものはいない、皆無言でそれを聞いている。それを理由を訊かせてほしいと解釈した私は言葉をつづけた。
「私二付イテクルト言ッテクレタ皆ニハスマナイガ、コレカラ先ハ恐ラク・・・イヤ茨ノ道トナルダロウ。ナニセ今マデノ自分自身ヲ否定シナガラ生キテイカナケレバナラナイノダカラナ。艦娘タチト何度モ戦イ傷ヲ負ッタコトアッタ、時ニハ仲間ヲ、家族ヲ失ッタ。ソレニヨッテ生マレタ憎シミヲ抑エナガラ生キテイクコトハ想像ヲ超エル苦痛トナルダロウ。ソレデモ私二付イテクルノカ、モウ一度訊カセテクレ」
「アラ、今更ソンナコトヲオッシャルノデスネ姫様ハ」
　ル級が微笑と共に前に出てくる。その言葉からは侮辱などは一切含まれずただ本当に思ったことを言っただけの様だ。
「私タチハ本来命令サレテタダソノ通リ動クモノ、シカシ姫様ハソレヲ良シトシナカッタ。自分タチノ意思デ行動シ命令サレテモ鵜呑ミニセズ考エル機会ヲ与エテクダサッタ。モシ私タチガマタ命令サレテ動イテイルト思ッタラソレハ間違イデス、皆自分タチノ意思デ貴女二従オウトシテイルノデス」
　ル級の言葉に同意するように集まっていた皆が私を見つめてくる。確かにもう聞いていたなお前たちがどんな気もちで私について来ようとしていたのかは。全く最近は余計なことばかり考える。まぁ、何も考えず突っ走ることよりはマシだとは思うがな。
「……分カッタ、デハ改メテ言オウ。コレカラヨロシク頼ム」
「ハッ！」
　本当に頼もしかった、こんな異端者の私に付いてきてくれることが嬉しかった。皆が私を信じてくれていることに誇りを感じた。危険な道だと分かっても途方もない苦行だとしても皆は私に付いて行くと答えてくれた。そんな彼らに報いようと絶対にこの戦いを終わらせると一段と意気づいていた。

しかし私はその期待に応えられなかった。そしてあの日から私は壊れてしまった、いや戻ってしまったと言った方が正しいのだろうか。

目的のために日々を過ごし資材を集め基地に帰ろうとしていたあのとき、あと少し私に力があったなら……。

新しい海域にも慣れ基地もある程度整ってきていた。最近のやることといえば資材回収と基地の増強だった。基地の増強と言っているがやっているのは居住スペースの拡張だ。軍事的な改造など全くしていない。

理由としてははぐれた深海棲艦を回収するためだ。未だに人類と深海棲艦の戦争は続いているがそうなるとどうしてもはぐれてしまったり、運よく一人だけ生き残ってしまう者もいる。それを運よくと言ってしまっていいものなのかと考えてしまうが戦争をしているならしょうがない、何事も命あっての物種だ。それらを受け入れるために拡張をしているのだが資材が中々集まらない。

「マダコノ辺リダトコンナモノカ」

出来るだけ危険が少ないように基地の近場で集めてはいるがどうも出が悪い。なので今日は少しずつ移動しながら比較的多く出てくる場所を探しているがもっと遠くへ行かなければならなそうだった。

しかしその分艦娘と出会う危険も増える。資材は少しずつ貯めていけばいいが、もし艦娘との戦闘になったらこちらの被害は大きいだろう。ならばここは無理をせず地道にやっていくかと考えていたが、

「姫、モウ少シ遠出シテミナイカ？危険ハ増エルガ今ハ一人デモ多クノ仲間ヲ助ケタイ」

珍しくヲ級が自分から私に意見を申し出た。普段は物静かで余り他人と接していないヲ級だが本当は人一倍の仲間思いだということはこの場にいる者全てが知っている。

「シカシダナソレデハ……」
「私モ同意見デス。今ハ一刻モ早ク基地ヲ強化スルベキカト」
「ル級モカ」
　より良い成果を得るためにはリスクが付きまとう。しかしヲ級やル級の言っていることも分からんではない。
「ウム……」
　正直私はどちらとも決めきれずにいた。リーダーとしての立場と私情に板挟みされていた。しかしどちらかは選ばなければならない。そして私は結論を出した。
「ソウダナ、今ハ一刻モ早ク基地ノ増強ニ取リ掛カルトシヨウ」
　今思えばここで無理矢理にでもヲ級やル級を納得させ引き返せばよかったのだろう。しかし私は部下からの頼みという自分勝手な言い訳を作り深く進むことにしてしまった。
　これが破滅への一歩だということに気づかないまま。

　結果としては満足いくほどの資材が取れた。遠出したこともあってほとんど手付かずの穴場を見つけられることもでき十分過ぎるほどの成果だった。皆も満足した様子で和気あいあいとしている。それを見ていると自然とこちらの顔も緩んでしまう。やはりここまで来た意味はあったとそう思えた瞬間だった。
「コレダケ採レレバ一気二基地ガ大キクナル……！」
「ソウネ、チャント採レルカ心配ダッタケド杞憂ダッタヨウネ」
　ヲ級やル級も心の底から嬉しがっているように見える。それも仕方のないことだろう、何よりも仲間のことを大切に思っているヲ級だ、また誰かを助けられるなら彼女にとってこれ以上の喜びはないのだろう。
「サァ、ソロソロ帰ルゾ」
　さすがにこれだけの資材が採れれば十分だと考え基地に帰ろうとする。しかし一応のため頭数を確認していたときヲ級の顔色が急に

悪くなっていたことに気づいた。
「ヲ級一体ドウシタ？」
「付近ノ偵察ニ出シテイタ艦載機カラ連絡……敵艦娘ヲ発見繰リ返ス、敵艦娘ヲ発見。敵ハ真ッ直グコチラニ向カッテキテイル！」
「何ダトッ!?」
　予想していなかったわけではない、そんな都合のいいことなどあるはずがない。そうは思っていてもつい考えていたのかもしれない、このまま何も起こらず帰れると。
「全艦最大戦速デ基地マデ戻レ！」
「姫ハ!?」
「殿（しんがり）ヲヤル。ソレマデニデキルダケ離レロ、私モロクナ武装ナド『コイツ』シカイナイカラナ」
　そう言って私は私の艤装であり家族でもある『モノ』の頭を撫でた。私たちは一部の艦を除いて艤装を付けていない。ここにいる者たちは戦いを望んでいない、だから艤装を外させた。それがどれだけ危険なことなのかは皆で話し合った。そして皆納得してくれた。
　私はこの部隊のリーダーだ。ならば部下を守るのが当然の義務であり、部下の盾で在るのが私の役目だ。
「キタゾ！」
　ヲ級が敵艦載機の接近を知らせてくれた。艦載機の種類を見ると今までも何度か見ているものだが、あれは確か高性能のものだったはずだ。そこから察するに敵の練度も主力級の艦だろう、ならば時間の猶予はないすぐにでも撃ち落とさなければ退き始めたばかりの皆に追いついてしまう。
　今対空砲火ができるのは私とル級、重巡リ級、ネ級数隻。それとヲ級だけだ、あの艦載機の性能を踏まえるとどうしてもこちらの数に不安が残る。しかしやらなければならない、装甲空母姫と誓ったことをそう易々と破るわけにはいかないからな。
「砲撃、来ルゾ！各艦散開！マダ敵ハコチラヲ狙イキレテイナイ、的ヲ絞ラセナイヨウニ動ケ！ル級トヲ級、重巡ハ対空弾幕ヲ張レ！ダガ意識ハ回避二向ケテイロ、当タラナクテモイイカラ奴ラノ自由二サセル

ナ！」
　艦載機に続き砲撃も艦娘たちは行ってきた。この距離ではそう当たるものではないがそれでももたもたしていたら、いつ当たってしまうかは分からない。だが敵も当てるつもりは恐らくない、こちらの混乱を誘っているのかそれとも他よりも的がデカい私を狙っていたかのどちらかだろう。
「姫様、私モココニ！」
「ダメダ、私ノ次ニコノ部隊ヲ率イルノハオ前ダ、ル級。今オ前ガココニ残ッテシマッテハ余計ニ被害ヲモタラス」
　歯がゆい気持ちだっただろうなル級は。もしかしたら私が死ぬかもしれないと思っていたのだろう。だから私と残り、少しでも生存率を上げようとしていた。しかしそれでは私が残った意味が無い。
「私ハオ前タチニコレ以上戦ッテ欲シクナイ。汚レルノハ、犠牲ニナルナラソレハ私ダケデイイ」
「何ヲ今更！既ニ私ハ汚レテイマス！ナラバ私モ残ルベキデス！」
　いつもは落ち着いているル級がここまで感情的になるほど私のことを危惧してくれているのは嬉しかった。しかし私からすればお前たちが傷つくことの方が自分が傷つくことよりも何倍も、何百倍も辛い。
「心配スルナ、望ミハ薄イガヤレルダケヤッテミル」
「マサカ……！」
　多分お前が想像していることを私はやろうとしている。しかしこれはいつか来ることだったのだ、今更それが来たところで私がすることは変わらない。
　戦争の最中でも戦わずして勝つことができるか、もしくは和解することができるのか。私が求めたいのはこの戦争を無くすことだ。戦ってしまってはそれが永遠と続く連鎖となる。なら最初からそれを断つしかないのだ。
「オ前タチハ私ノ希望ダ。ダカラココデ私ノ無理ニ付キ合ッテ傷ツク必要ハナイ。タトエ私ガ沈ンダトシテモオ前タチガ私ノ想イヲ継イデクレレバ私ハソレデイイ」

どうせこのまま話し合ってもル級は引き下がらないだろう。ならもう言葉は不要だ無理にでも行かせてもらう。
「姫様ッ」
「マダ何カ言イタイノカ？」
必死にこらえるようにしているル級を見ながら私は尋ねた。
「ドウカゴ無事デ！」
そう言うなり、ル級は既に離脱を始めていた仲間のところに戻っていった。
……全く最初からそう言えば良かったものを。余計な時間を使ってしまったではないか。
しかし、そう言われてしまっては沈むわけにはいかないな。

第5話　現実

ル級が離れていったあと私は艦娘たちに接近しようとした。もちろんこちらの事情など奴らはお構いなしに砲撃なり爆撃なりをしてくるが艤装のおかげで当たることはなかった。私の艤装は二足歩行の目がない代わりに異常に発達した腕がある怪物といった体だがその機動力は折り紙付きだ。何の苦も無く砲撃を避けられるほどなのだから。

ただ空となると少し勝手が悪くなる。無論機銃も備えているが精度はそれほど良くもなく数も少ない。そのためコイツだけに任せるのは少々心もとない。だからそこは私が補う。そういう仕組みだ。

しかしそれでも限度はある。いくら私が補助をするといっても主な部分は全て艤装頼りだ。ある程度近づけられれば空母は無力化できるが、それまで被弾せずに近づけることができるのかそこが問題だ。

「戦艦一隻二、空母二隻、重巡二隻ソレト軽巡一隻カ。戦艦ガ少ナイノハ幸イダガ魚雷ニハ注意セネバナ」

軽巡や駆逐といった艦の主砲なら大したダメージにはならないが魚雷だけは話が別だ。当たりどころが悪ければ一撃で致命傷になりかねない。もしそれで機動力が失われたら袋叩きになって終わりだ。

できるだけ軌道を読まれないように接近しながら私は次の行動を考えていた。

(ナルベクコチラニ注意ヲ向ケルヨウニシナケレバル級タチガ危険ダ。沈メル気ハナイガ

コチラカラ仕掛ケテ引キツケルシカナイカ?)

抵抗はしても敵意は見せない。そんなことができるのかと言われればできる気はしない。もともと私たちは敵同士だ、敵意が無いということを証明するなど無理に等しい。加え艦娘たちからすれば『姫級』である私を沈めないわけにはいかないだろう。

『姫』とつけられた深海棲艦は通常の深海棲艦と比べて圧倒的に強

い。艦娘と一対一でも負けることはないだろう。だからこそ艦娘たちは余計に私を沈めようとしてくる。
だが今はそれが功を奏している。艦娘に近づくのは容易ではないが一番の目的はル級たちが逃げる時間を稼ぐことだ。それさえ達成できれば問題はない。
「ッ……ソロソロ考エ事ヲシテル場合デハナイヨウダナ」
砲弾が近くに落ちてきた。艦娘たちの精度が上がってきているようだ。こちらの方が機動力が上とはいえ慣れれば対処はできてくる。完全にこちらを捉える前に接近しなければ私はもちろん、ル級たちまで危うくなる。
「速度ヲ上ゲルゾ、最大戦速ダ」
私がそう伝えるとコイツは無言でうなずいた。口はあるから声は出せるのだろうが会話が成り立つほどの喋れるかは分からない。大体コイツが喋るときなどうめき声しか出していない。
しかしこちらの意は伝わっているので次の瞬間には一段と速度が増していった。艦娘たちまであと少しという所まで来たがこれからどうするのか正直に言って何も思いついていない。
(ヤルダケヤッテミル、トハ言ッタモノノドウスルカ……)
ただ近づいていくだけなら沈められかねないだろうし、だからと言って本格的に戦闘を始めてしまっては元も子もない。何か策の一つでも考えられればいいのだろうが、いかんせんこういう事態は初めてのことだから思考が追い付かない
(余計ニ警戒サレカネナイガコレシカ方法ハナイカ)
あまり良い案とは言えないがそれ以外に思いつかなかったので妥協するしかない。さらに速度を上げるため息を整え力を溜める。その意識をするだけでコイツは私の考えた通りに動いてくれる。
「きゃあ!?」
爆発的に速度が上がり次の瞬間には艦娘たちの横をすり抜けていた。そのとき身軽そうなヤツを少々手荒だが借りることにした。要は人質だ。そうでもしなければこいつらは私の話など聞くはずもないからだ。

「由良！」
「大丈夫です……長門……さん。私にかまわず戦艦棲姫を……」
「くっ……卑怯な！」
　旗艦と思わしき戦艦が声を上げて叫ぶ。どうやら私が人質に取ったヤツの名前だったようだ。コイツ（由良）には悪いが私とてこれしか手段はなかった。少々苦しい思いをするだろうが今は我慢してもらうとしよう。
「交渉ダ。コイツヲ殺サナイ代ワリニ私ノ部隊ヲ見逃シテホシイ。無論破レバコイツノ命ガアルカハ保証シナイ」
「なに？」
「聞コエナカッタノカ？交渉ト言ッタンダ」
　我ながら舌足らずというか単刀直入というか……。確かに誰かと話すのは苦手だし、仲間と話すときも基本的に事務的なことしか話してなかったとはいえ最低限のことしか喋らない癖がこんなところにまでてくるとは。
　しかし私の突拍子のない話に艦娘たちは耳を傾ける気にはなったようだ。ひとまずこれでなんとか話すことはできそうだ。
「なぜそんなことをする！貴様らは私たちの敵だろう。戦いたいのならば戦えばいい。もとより私たちはそのつもりだ！」
「マズハ武器ヲ降ロシテ話ヲ聞ケ。私ノ部隊ニハ私ト数隻ヲ除キスベテノ艦ガロクナ武装ヲシテイナイ。私タチニ戦意ハナインダ。タダ静カニコノ海デ暮ラシタイソレダケガ我々ノ願イダ」
「笑わせる。第一それが本当という保証があるわけでもないだろう？」
「ダガ私ハ殺シテイナイ。私ノ艤装ヲ使エバ簡単ニ殺セルコイツヲ、ソレ以前ニ私一人デモコノ場ニイル全員ヲ」
　これは嘘ではない。確かに艦娘たちの練度は決して低くはないが勝てないわけではない。むしろ私一人で勝てるほどだ。第一、空母が二隻いる状態で私の接近をゆるしたのならそいつらはもう使えない。その時点で数の差はぐっと減る。
　それにまず与えられるダメージの量が違う。私や他の『姫級』が艦

娘たちからの砲撃で一撃で沈むことはまずない。それに対し艦娘からすれば私の砲撃が一発でも当たれば即致命傷だ。仮に砲撃が無くても私の艤装の力で殴るなり絞めることはできる。
「私ノ要求ハ仲間タチガ無事ニ離脱スルコトダケダ。私自身ハソコニ含マレテイナイ、私ヲドウスルカハ、オ前タチ次第ダ。無論私モタダデヤラレル気ハナイガナ」
「解せんな。なぜそうまでして逃げようとする。貴様らは人類(われわれ)を滅ぼそうとしているのではないのか?」
「私モ昔ハソウダッタ。タダ本能ノ赴クママニ艦娘タチト戦ッテイタ。シカシ私ハコノ戦イニ意味ガアルノカ、ソンナ疑問ヲ思イ始メタノダ。ソシテ、ソンナ戦イノ中デ命ヲ落トシテイク仲間タチヲ見ルノハモウ嫌ニナッタ。ダカラ私ハモウ奪ウタメデハナク守ルタメニ戦ウコトヲ決メタノダ」
　艦娘たちからの反応はない。それも当然といえば当然だ。今まで訳も分からず攻めてきた相手がこんなことを言ってきたら誰だって警戒はするだろう。しかし私はそれでも敵意がないことを伝えたかった。それと同時にル級たちが逃げる時間を稼ぐためにも。
「随分立派な思想だな。しかしそれがなんになる?貴様がそうしようとしていようがいまいが結局どこかで戦闘は起こる。貴様はそれすらなくしたいというのか?」
「究極的ニハソウナルガナ。タトエドンナ壁ガ立チフサガッテモ私ハソレヲ乗リ越エル。ソシテコノ無意味ナ戦争ヲ終ワラセル」
　生半可な覚悟ではない。
　仲間たちを救いこの戦争を終わらせるなら自分にどんな火の粉が降りかかろうと全てを振り払って進んでみせる。
「……ふっ。戦争のない世界、確かに誰もが願うような理想だな」
　なにか考えるように沈黙する艦娘。その間にも私に拘束され震えている由良に「大丈夫ダ。殺シハシナイ」と伝えた。少しは効果があったのか震えは収まり先ほどより表情は軽くなった。
「いいだろう、私たちは貴様の部隊にこれ以上攻撃をすることをやめよう。その代わり由良に手を出したら……」

「分カッテイル、自分デ言イ出シタコトヲ破ルホド落チブレテハイナイ」
良かった。
自分でも驚くほど簡単に艦娘たちは見逃してくれると言ってくれた。約束通り由良を艦娘たちの元へと返す。
今までの会話の間にもそれなりにはル級たちも距離をとれたはずだ。これならば無事に皆が帰れる。そう思っていた。
だが……
「ナッ!?」
突如ル級たちに砲撃が飛来し次々と付近に落下していく。
『長門、これでよかったの?』
「あぁ、充分だ。よくやってくれた陸奥」
目の前にいる艦娘たちではない。目を凝らせばここからに離れた場所にいる艦娘たちから放たれている。
次から次へと、砲撃はやむことなくル級たちに降り注ぐ。
「ドウイウコトダ!貴様ラハ危害ヲ加エナイノデハナカッタノカ!?」
「なにを言っている?私たちはなにもしていないではないか?」
「マサカ……、ソンナ屁理屈デ!」
「だが貴様は他になにも言ってこなかった。それは貴様が犯した失態だ」
「クッ……!」
あくまで自分たちは契約を破ってないと言い張るのか貴様らは!
最初から私たちを沈めるためだけにあんな演技をしてまで、なぜそこまでして戦争がしたい?
私たちが人類の敵だから?艦娘と私たち(深海棲艦)はそういう運命だから?ただ単に戦争がしたいから?
そんなことがあってはならないあるはずがない。誰もが平和という安心して生きられる世界を望んでいるはずだ。それなのに……
『姫様!敵艦隊がコチラニ攻撃ヲ……キャァ!』
「ル級!?クソ!今スグ攻撃ヲヤメサセロ!」
「それは無理な話だな。元より私たちと貴様らは敵同士だ。それが出

会ってしまえばこのようなことなるのは当たり前だろう?」
さも当然のように言ってのける長門。その間にも次々と攻撃を受ける仲間たち。そんな状況で私は動くことができなかった。
「ア、アァ……」
出てきたのは声にもならない情けない嗚咽だった。助けにいくことはできた。目の前の艦娘たちを蹴散らし今すぐにでも皆の所に向かいたかった。しかしそれ以上の無気力感に襲われ私はなにもできなかった。
力ある者が弱き者を助けるという責務があるにもかかわらず、ただ遠くから皆が沈んでいくのを見ている。
「ヤメロ、ヤメテ……ク……レ」
何とかひりだして出た言葉は懇願だった。もう家族(なかま)を失いたくないその一心でここまで来た。そのために無謀だと分かりながらも皆に打ち明け、協力してもらうことにした。
しかしその結果がこれだった。守ると誓ったものは守れず、自分のせいで仲間を殺すことになってしまった。
もう私はうなだれて廃人のように懇願することしかできなかった。
そんなとき誰かが語り掛けてきた、「それでいいのか」と。

私は装甲空母姫になんと言った。
復讐の連鎖を止める、それを成し遂げてみせるだと、笑わせる。
戦争をなくす、そんなものもう既に起きてしまった。
私はなぜこんなことをしようと思った。
仲間(かぞく)が沈んでいくのを見たくなかった。嘘をつけ。それがこのざまだ。
意識が朦朧(もうろう)としている中で私は自分を見ていた。平和ではなく戦争の道を選んだ自分を。
結局はこうなる。深海棲艦(わたしたち)がどんなに変わろうと人間は全て否定

する。
　たった一度火蓋を切っただけで私たちを敵とし、虐げる。言葉が通じようと姿が似えど一度そう判断されればゼロになるまで駆逐される存在。
　人間の子供でも考えるようなほんの少しの願い、希望、夢。それらは全て奴らからすれば戯言にしか聞こえない。
　今更なにを言っている、攻めてきたのはそっちからだ。なら倒すしかないだろう、と。
　だがそれでも。
　なぜ戦意を見せなかった仲間が沈まなければならなかった!?なぜ平和を願った皆が攻撃されなければならなかった!?以前にあった出来事で勝手な烙印を押されどうして死ななければならない!?
　人間は勝手だ。自分たちを守るためならどんなことでも平気でする。騙し、利用し、裏切る。そんな奴らに最初から交渉など無意味だったのだ。
　そんな奴らに私たちは苦しめられてきたなどと認められるはずもない。
　……あぁ、だったら私もそう生きればいいのだ。本能の赴くままに。生まれた時から決まっている運命に。人間が勝手に決めてきた私たちの想像通りに。
　ならもう迷う必要はない。ただ壊し、好キに殺ス。今まデ堪エテきタモノを吐き出セ、ソシテ叫べ。
　モウ私ヲ抑エルモノハナイノダカラ!!
「アアアアアアアアアアア――――ッッ!!」
　そのとき二匹の獣が海を割るように吠えた。

―――

「ふん、あれほど威勢を張っていたのに壊れるのは早かったな」
「長門さんあそこまでやる必要は……」

「相手は深海棲艦だ、容赦はいらん。好きにさせれば奴らの思う壺だ、先に仕掛けられる前に潰しておいた方がいい」
「それは……そうかもしれませんが」
未だに項垂れている戦艦棲姫を見ている由良の表情は複雑だった。
確かに深海棲艦は敵だ。何の前触れもなく見境なしに破壊していく。今までも、そしてこれからもずっとそうであろう。少なくとも他の艦娘たちはそう思っていただろう。
しかし由良は、これでよかったのかと考えていた。
今まであんな交渉をしてくる深海棲艦などいなかったし、あまり戦うことにも積極的ではないように感じた。
自分たちは深海棲艦と戦うための存在と分かっていても間近で聞いていた由良には分かった。あの言葉は嘘ではないと。本当に仲間が大切でそれを守りたいだけだと。
「まぁあとは陸奥さんたちに任せれば大丈夫でしょ！粗方私たちがやることは終わったし」
「油断しないの飛龍。まだ全部倒したわけじゃないんだから」
「それはそうだけど、こうも呆気なく終わるとね～」
二航戦の飛龍と蒼龍が構えていた弓を下しながら警戒を解く。それでもどんなことが起きてもいいように最低限身構えるあたり練度が高いことが分かる。
そうはいっても目の前に敵がいる以上空母ができることは自爆覚悟の特攻くらいしかないの、で先ほど飛龍が言ったようにやれることがない。その点で言えば蒼龍も多少なりとも物足りなさを感じていた。
それはどうやら他の艦娘たちも同じようで、
「むー、私としてはまだ暴れたりないから少しくらい来てくれてもいいのだけれど」
「それには同意だが、まぁ早く終わるならそれでいいだろう。少々早いが今から一杯やるのも悪くはない」
「あっそれいいわね！もちろん私も一緒に飲んでもいいのよね？」
まだ昼頃だというのに酒の話をしているのは足柄と姉妹艦の那智

だ。那智は元々かなりの酒豪だが足柄も負けず劣らずだ。大体この二人が飲んでいると酔っぱらって寝てしまうのでその後始末をするもう二人の姉妹艦はいつも手を焼いているわけだが。
いつも通りの光景。任務を終え声からの予定を親しい仲と話し合う。艦娘たちにとってはいつも通りで何気ない幸せ。だというのに由良には戦艦棲姫のことが気がかりでならなかった。
情に流されやすいといえばそうかもしれない。他人に言われたことをよく信じるタイプだし仲間からもそれでちょっかいを掛けられたこともあったが、由良にはやはり戦艦棲姫の言ったことが嘘には感じなかった。
「各自私語をするのは自由だがそろそろ仕上げに入るぞ」
長門の一声で艦娘たちの気が鋭くなる。最早人間でいうなら廃人同然だが相手は深海棲艦、ましてや戦艦棲姫だ。油断をする暇などないしこれからなにをするか分からない。
「飛龍と蒼龍は離れていろ。どのみち私たちがやるからな」
「了解です長門さん！ばーーっと派手にやっちゃってください！」
「もう飛龍！油断しないようにって言ったばかりでしょ！」
「ふっ、いいさ。ビッグ７と呼ばれた私の力、よく見ておけ！」
飛龍の調子のいい言葉に機嫌をよくしたのか微笑みを浮かべながら答える長門。彼女にとってビッグ７という称号は誇りでありなくてはならないものだ。まだ長門たちが艦娘ではなく軍艦であったとき長門型二隻は日本の象徴でもあった。それが艦娘になった今でも残っているのだろう。
「各艦、全主砲斉射！目標、敵戦艦棲姫！」
主砲を構え戦艦棲姫に狙いを定める。さすがの『姫級』でも練度の高い艦娘たちの一斉射をくらってはひとたまりもないだろう。
「てーーーッ!!」
轟音とともに砲弾が発射され戦艦棲姫に向かっていく。
巨大な水飛沫が上がり長門たちに降りかかる。思ったよりも視界は悪くなったがもう敵はいないだろうと思い戦艦棲姫の残骸を確認しようとした長門だったが――

（黒煙が見えないだと……？）
長門が装備している艤装には九一式徹甲弾が装備されている。徹甲弾とは敵の装甲を打ち破り破壊することも目的としたものだが、これ自体に炸薬は含まれておらず目標に命中しどこかしらの部分に損害を与えたときその部分から黒煙が上がることが多い。
しかしあれだけの集中砲火を浴びてどこも破壊されることなく沈むことなどあり得るのだろうか。あの艤装のどこかにも弾薬庫や機関部といったものがあるはずだ。そこだけ砲撃を受けず沈むわけがない。
ならば残る可能性は――
（まさか!?）
幾多の戦場を乗り越えてきた長門だからこそ気がついた答え。ありえないことだが今現実で起きている以上それを皆に知らせなくてはいけない。そう考え言葉を発した長門だったが、
「皆気を付けろ、ヤツは――」
その言葉が続くことはなかった。
何故なら――
「遅イ」
戦艦棲姫の艤装としてはあまりにも化け物じみた異形によってによって殴り飛ばされ一撃で意識を刈り取られたからだ。

――――

水飛沫が晴れたときそこに立っていたのは戦艦棲姫だった。
長門が怪物によって殴り飛ばされたとき飛龍たちは一瞬何が起きたのか分からなかった。沈めたと思っていた戦艦棲姫、艤装の破片をまき散らしながら海面をバウンドするように吹き飛ばされた長門。なによりも先ほどまで廃人の様だった戦艦棲姫と目の前にいる怪物が同じだとは思えなかった。
「モウ少シ早ク始末スレバコンナコトニハナラナカッタダロウニ。マァコレガ貴様ラノ失態ダト言エバイイダロウナ」

「長門さん！くっ……、この！」
「待って飛龍！一度体制を立て直さないと！」
「ソンナ暇ガアルトデモ？」
「なっ!?」
　艦載機を出そうとしていた飛龍とそれに対し一旦離脱することを提唱しようとした蒼龍だったがいつ回り込んだのか背後を取られていた。それでもすぐさま自爆覚悟で艦載機を放って被害を負わせようとしたのは流石だったが矢を放つ直前に弓を発達した腕で握りつぶした。
　絶望に染まる飛龍と蒼龍。だがそれで終わりではない。怪物は直接二人を掴みその怪力によって締め上げようとしていた。
「ぐっ……っ」
「この、離し……なさい……よ」
　飛龍たちにも勿論装甲は備わっているが、飛龍と蒼龍はあくまで空母。戦艦と比べるとどうしても脆い。
　そんなもの怪物の前では紙に等しい。矢筒ごと矢は砕かれ飛龍と蒼龍は苦悶の表情を浮かべる。
「二人を離せぇぇぇーーー！」
　距離を詰めてきた那智と足柄が砲撃を放ちながら怪物へと向かっていく。
　しかし戦艦の砲撃でも沈まない怪物にとって重巡の砲撃などうるさい蠅がいるのと変わりなかった。
　やがて堪えきれなくなったのかゆっくりと那智たちに振り向き次にとった行動は、
「なんだと!?」
「ちょっと!?」
　手にしていた飛龍と蒼龍を力任せに那智立ちに向かって投げた。弾丸のような速度で迫ってくる二人を那智たちは止めるすべがない。さらに那智たちも怪物に向かって速度を上げていたので避けることもできなかった。
　そして鈍い音とともに四人は吹き飛ばされる。

「がぁぁっ！」
「なんて奴なのよ。こんな滅茶苦茶なことしてくれるなんて……」
悪態をつきながらも立ち上がる二人。
那智たちよりも損傷の激しかった飛龍と蒼龍は海面に打ち付けられた時点で気絶していた。那智たちも決して無事ではないが二人よりかはマシな状態だった。
しかしそこで終わるほど怪物も生易しくなかった。
那智たちが起き上がるときにはすでに両肩の主砲の照準は終わっていた。
あとはすでに満身創痍な艦娘たちにとどめを刺すだけ。
「ははっ……ほんと、怪物ね」
これが怪物が聞いた最後の言葉だった。

「そんな…皆さん…」
唯一無事だった由良は目の前の惨状を前に言葉が出なかった。
たった一瞬の出来事。不意打ちのような形とはいえ高練度の艦娘たちを倒していき、圧倒的な力を見せつけた怪物を前に由良はなにもできなかった。
皮肉にも先ほどまでの戦艦棲姫のように。
「あっ」
不意に怪物と目が合った。
殺される。
早く逃げないと。そうしないと自分も皆と同じように殺されてしまう。
しかし由良の意志とは裏腹に体がまったく動かなかった。なぜ、簡単な話だ。ただ単に恐怖で足が震えているからだ。
目の前にいる絶対的な死。その力を目の当たりにした由良にはもう、どうしようもなかった。
「ウウゥ……」

呻き声をもらしながらゆっくりと近づいてくる怪物。由良から見ればこれから自分をどういたぶろうと考えているようにしか思えなかった。

その発達した腕で千切られるのか、それともその巨大な咢で丸呑みにされるのか。想像するだけでも身震いする。

だが、

「え？」

歩みを進めていた怪物がピタッと止まった。よく見るとその視線の先には戦艦棲姫がいた。

怪物はじっと戦艦棲姫を見ていたがやがて由良に背を向け戦艦棲姫の元へと戻っていった。由良はなんで、という疑問を抱いたものの自分がもう安心だということに気づくと緊張が解けたのか糸が切れたように気絶した。

闇に落ちる寸前、砲撃音が聞こえてきたがそれ以上に怪物の叫び声が大きく聞こえた。

そして由良が完全に闇に落ちたあと陸奥たちの艦隊が壊滅するまで数分もかからなかった。

第6話　救いの手はそこに

（私ハ……マタ失ウノカ。モウ、二度トアンナコトガ起キナイヨウニト誓ッタノニ）

戦闘が激しさを増す中、忌々しい過去と今の状況が重なって見えた戦艦棲姫は心の中で一人弱音を吐いていた。

不意打ちがましい砲撃、次々と損傷していく仲間たち。それがどうしてもあの惨劇を蘇らさせる。あんなことがもう起きないよう今まで力をつけてきたはずだった。しかし、そんな決意を嘲笑うように時は流れていく。

このままではあの時と変わらないまま、この戦闘は終わりを迎える。それだけは絶対にさせてはいけない。

「戦艦棲姫様！コチラノ被害ガ甚大デス！コレデハイツマデ持ツカワカリマセン、後退シテクダサイ！」

「私ガ下カッテハマスマス被害ガ増エルダケダ！ソレヨリモ損傷ガハゲシイ者ハ下ガラセロ！」

「デスガ姫様！」

「奴ラハ、私ガ必ズ沈メル!!」

自身の被害が激しくなっていくのにもかかわらず戦艦棲姫は攻撃の手を止めることはなかった。

全身に痛みが走ろうと、意識が朦朧としても、そんなことはどうでもよかった。戦艦棲姫をつき突き動かしているのは『怒り』だ。

仲間を沈められた恨み、自分の理想に付いてきてくれた仲間たちの無念。そして何より戦艦棲姫自身のありとあらゆる負の感情。

それだけが今の戦艦棲姫を動かしている。

『アァ、ヨ……タ。姫……ガ…ジデ』

陸奥が率いていた艦隊を退けた後、生き残っていたのはヲ級と少数の駆逐艦や軽巡艦たちだった。戦艦棲姫が駆け付けた時には既にル級は沈みかけていた。今となっては最期の時に言われた言葉すら思い出せない。

『見テ……カ……タ。私タチト人……カリ……エル時ヲ。ソシテ……

貴女ノ……ヲ』
心がどんどん黒く染まっていく。今の戦艦棲姫にあの時の理想はない。あるのは、艦娘全てを沈めるという復讐心のみだ。
「忌々シイ艦娘ドモガッ！」
あの惨劇からヲ級は自分を責めるようになってしまった。自分が余計なことを言わなければこんなことにはならなかったはずだと、自責の念に苛まれてしまった。
どれだけ励ましてもヲ級が立ち直ることはなく、それが一層、戦艦棲姫の恨みを加速させる。
（ヲ級ハアンナニ優シイ心ヲ持ッテイタ。少シデモ仲間タチガ休メルヨウニト、心カラ思イナガラ私ニ進言シタ。ソレハ間違イナドデハナカッタ……！）
主砲に装填を済ませ、豪雨のように艦娘たちへと降りかかる。心は壊れそうだというのに、その射撃精度は恐ろしく高かった。嫌にでも体に身に付いた動作が、あらゆる工程を飛ばし戦艦棲姫を復讐鬼へと変貌させる。
そのとき、戦艦棲姫に砲撃を行おうとした艦娘の付近に水柱が立った。
一体誰が？と後ろを振り向くと先ほど、負傷した仲間と一緒に下がらせたはずの深海棲艦が戦艦棲姫を守るように陣形を作ろうとしていた。
「ナニヲシテイル！下ガレト言ッタ筈ダ！」
「私タチハ姫様ニ付イテ行クト決メマシタ。ダカラ姫様ガ戦ウナラ私タチモ戦イマス。タトエ沈ムコトニナッテモ」
「ナゼドイツモコイツモ、私ノ命令ヲ聞カナイノダ……。私ハモウ、ソンナ決意ヲ言ワレルヨウナ存在デハナイノニ」
「家族ガ家族ヲ守ッテ、ナニガオカシイノデスカ？」
「ッ！」
そう言われて戦艦棲姫は思い出した。自分がなんの目的で部隊から離れ、この海域に移り住もうとしていたのか。自分の本当の望みは何だったのかを。

それは、自分の復讐で仲間を傷つけることではない。仲間がもう傷つかないように自分ができることをしようと、そう決めていたはずだ。
（部下カラ言ワレテ気ヅクヨウデハ私モ、マダマダノ様ダナ……）
無論艦娘は憎い。過去の出来事を水に流すつもりなど毛頭ない。
だが今は、仲間たちを離脱させることが最優先だと分からないほど戦艦棲姫も落ちぶれてはいなかった。
「姫様？」
「スマナカッタ。オ前タチノオ蔭デ私ハ、自分ノ成スベキコトガ思イ出セタ」
戦艦棲姫の様子を見て心配した深海棲艦が声を掛けると不敵に笑った顔で戦艦棲姫は後ろへ振り返る。
その顔には先ほどまでの怒りはなかった。
もう道を間違えることはない。自分には仲間（かぞく）がいることを改めて理解した戦艦棲姫に迷いはなかった。
「皆（みな）ヨク聞イテクレ！コレカラ私タチハ反転シ撤退スル。ソノ時、二人程艦娘ヲ抑エル為ニ私ト一緒ニ残ッテ欲シイ。私タチハ勝ツタメニ戦ウノデハナイ。生キ残ル為ニ戦ウノダ。ダカラ頼ム、力ヲ貸シテクレ。私ノ復讐ノ為デハナクオ前タチノ為ニ」
「何度モ言ッテルジャナイデスカ。私タチハ姫様ニ付イテイクト。ナラ答エハ決マッテイマス」
「……アリガトウ」
それからの行動は迅速だった。部隊をさらに細かく分け、一度にではなく少しずつ離脱するようにし、離脱する艦以外は艦娘を抑え、最後に戦艦棲姫と志願したタ級が撤退する。
この方法が最善だと戦艦棲姫は考え出した。
無論、後退するのが後になるほど危険は増すがネ級とタ級はそれを承知で戦艦棲姫の援護をすることを決めた。
今更下がれ、などとは言わない。
深海棲艦たちは今まで不甲斐なかった自分を信じている。だが戦艦棲姫は心のどこかでは仲間を信じ切れていなかった。

自分が守らなければ、と独りよがりに進んできていたがそもそもが間違っていた。もう自分の保護などいらない、深海棲艦たちもこれまでで成長してきたのだ。誰もが自分の意志を持ち戦艦棲姫と共に理想のために歩んでいた。

結局のところ戦艦棲姫はそのことに気づかないまま勝手に、守るべき存在だと決めつけていた。

「ドウヤラ昔見タ顔ガイルガ、恐ラク奴ハ私ヲ狙ッテクルダロウ。危険ナ役目ダガ、ココデナントシテデモ被害ヲ抑エル。頼ムゾ、タ級」

無言でうなずき艤装を構えなおすタ級。

タ級が志願してきた理由は自分の装甲に自信があるが故だ。タ級の艤装は、他の深海棲艦と違い派手なものではないがその性能は戦艦という名に恥じない性能を持っている。

「ワカッテイルト思ウガ、ココカラガ正念場ダ。各艦、気ヲ引キ締メテイケ！」

「了解！」

◇

「長門、深海棲艦たちは撤退を始めたようデース！戦艦棲姫とタ級が一番前で殿をしているようですが、どうするネ？」

「各艦、戦艦棲姫に集中砲撃！やつらの思惑に嵌るのは癪だが、やつを沈めれば後はどうとでもなる！瑞鶴と加賀は制空権を抑え続けろ！」

「了解！いきますよ加賀先輩！」

「ええ、鎧袖一触よ」

長門の号令により瑞鶴と加賀は流れるような動作で矢筒から矢を取り出し構える。この二人の練度ならばあの程度の数の深海棲艦に制空権をとられるようなことはない。

「やぁっ！」

「はっ」

裂帛（れっぱく）の気合いで矢を放つ瑞鶴に対し加賀は、余裕のある落ち着いた声で上空へと矢を放つ。全くぶれることのない矢はやがて、その姿を

艦載機へと変える。その数は、二人合わせておよそ八十機ほど。後のことを考え余力を残すことと、慢心をしているわけではなかったがこの数でも十分に深海棲艦たちを撃破するには十分だと考えたからだ。
「よしっ！今回もお願いね妖精さん！」
「妖精たちの力も大切だけど、艦載機の性能は私たちの練度で決まるということを忘れてはいないわよね？」
「もちろんですよ加賀先輩。私だって毎日鍛えてるんですから。それにいつも頑張ってくれている妖精さんたちに応援くらいしたいですし」
「……そうね。貴女はよく頑張っているわ。今の動きを見ただけでもそれは分かるもの」
　深海棲艦へと向かっていく艦載機を見つめながら、瑞鶴は笑顔ともとれるような表情を浮かべ成り行きを見守っていた。
　その間に長門は金剛たちと共に戦艦棲姫たちを追撃するために最大船速で戦場へと向かっていった。
「あれ？もしかして今褒めてくれました？」
「……気のせいよ。今は目の前のことに集中しなさい」
「え～今絶対褒めてくれましたよね～」
「……」
「いだい！いだいでふ！加賀先輩！」
　あからさまに話題をずらした加賀にニヤニヤと意地の悪い表情をした瑞鶴が近づいていくと頬を思いっきり引っ張られた。加賀としては瑞鶴のことは認めているがどうしても素直になれないのでちょっとした隙を見せると、調子に乗っていじりにくるのでこうしてやり返しているわけだ。
「全く、少しでも褒めるとこうなるのだから。これならもう少し厳しく接していこうかしら」
「えぇ～今でも厳し――――いだい！いだい！」
『あー、すまないが二人とも、作戦中だからもう少し緊張感をもってくれ。それと艦載機からの報告を頼む』
　また同じようなやり取りが始まりそうになったとき長門からの通

信が入った。その声には非難や真面目にやれといった感じではなく呆れや微笑が含まれていた。
　もっとも、長門もこのやり取りを聞くのは初めてではなく、この二人が一緒だと決まってこういう風になると分かっているからだ。
「了解。……っ」
『どうした？』
「第一次攻撃隊三分の二が撃墜された模様。残りの艦載機は敵の弾幕を超えて様子を見ています……敵は、リ級が小破しその他はほぼ無傷……と」
「えっ」
『なんだと!?』
　加賀の口から告げられた言葉が理解できず曖昧な反応しかできなかった瑞鶴とその内容に驚く長門。これがまだ練度が低い艦ならまだ分かる。相手は『姫級』だ。通常の深海棲艦よりも段違いの性能を持っている『姫級』なら対空性能も高いだろう。
　だが加賀と瑞鶴は鎮守府の中では古参に入る部類だ。その二人の航空隊があの数の深海棲艦にほとんど何もできなかったのは長門としては予想外だった。
（そこまでしぶといのかやつは……まだ加賀と瑞鶴には艦載機が残っているが今それを放ったとしても結果は同じだろう。やはり私がこの手で沈めるしかあるまい）
「金剛、私は戦艦棲姫を叩きに行く。そのときにお前たちには他の深海棲艦を頼む」
「なぜですか？さっき長門は皆（みんな）で戦艦棲姫集中的に狙うと言ったじゃないデスカ？」
「奴らの目的が撤退だと分かったからこちらは攻めるだけでいいと考えた。だがそれは間違いだった。改めて感じたんだ、奴らが陣形を立て直した直後から雰囲気が変わったのを。恐らくこのまま進んでも倒すことはできないだろう」
「だから貴女が囮になっている間に私たちがその他を沈めるということデスカ？」

「半分は正解だ。だが残りの半分は私の私情でもあるが、やつにはデカい借りがある」
金剛の目をじっと見つめながら長門は語った。それに対し金剛は少し考えた素振りを見せ頷きと共に答えを返した。
「分かりましター。旗艦である長門が言うなら私も文句はありませーン。ただし、万が一のことも考えてなにかあったときは私が艦隊の指揮をとりマース。いいデスネ？」
「あぁ、こちらも無理を言っているのだ。それくらいで済むなら安いものだ。そのときは私のことは気にせず――――」
「ノー、それを決めるのは私デース。というか引きずってでも連れて帰りマース！」
離脱しろ、と長門が言う前にそれよりも早く金剛が割り込んできた。片目だけを開きまるで、長門がなにを言おうとしているのか全てお見通しというような表情をしている。
「ふっ、お前という奴は、相変わらず考えているのだか考えていないのか分からないな」
「鎮守府の皆からもよく言われマース。でもこの際言わせてもらいますが、それって遠回しに馬鹿にしてますよネ？」
「さぁな。皆なりの愛情表現だろう」
「えぇーなんだか納得いかないネー……」
ジト目で不満を表している金剛だがそれにつられてか、金剛のトレードマークの一つであるアホ毛がしな垂れていた。
それを面白そうに見ている最上とそれを嗜める熊野もまた今のこの雰囲気が気に入っているらしく、戦闘海域に入るというのにとても和んでいるかのように見えた。
「そう拗ねるな。そういうところも含めて提督はお前のことを頼りにしていたぞ？」
長門が一言付け足した瞬間、アホ毛がピンッ、と立った。それを見た最上が声を出して笑いそうになるがギリギリの所で踏ん張った。その隣の熊野も口に手を当てて笑い出すのを堪えている。
やはり提督の話題を出すと扱いやすいなと、内心長門は少々意地悪

く思っていた。
長門たちが所属する鎮守府の提督は、誰にでも優しく無理な作戦を決行しないことから、大なり小なり艦娘たちから好意を持たれている。
と言っても、もともと金剛はそういうことに関してはものすごくオープンなので自分から積極的にアプローチをかけている。その結果、鎮守府内では度々その光景が目撃され、やがて鎮守府の日常となってしまった。
「Ｗｏｗ！それは本当ですカー！」
予想通り金剛が食いついてきたことに内心笑いながらも長門は言葉を？げた。
「あぁ、本当だ。これまでのお前の功績も買っていたようだから、今回の作戦で結果を残せば提督からなにかあるかもな」
「そうならそうと直接言ってくれれば良かったのにネー。提督ったら恥ずかしがりやさんデスネ！」
気持ちの切り替えが早いのも金剛の一つの利点だろう。先程までの落ち込みとは打って変わって今では元気ハツラツだ。
単純な奴だ。
そう軽く毒づく長門だが勿論金剛が嫌いなわけではない。
むしろ金剛には尊敬の念を抱いていた。
仲間と気軽に触れ合い、場の雰囲気を良くしてくれる。
自分とは違うその在り方は、艦隊に――いや、鎮守府にとって無くてはならない存在だ。
「なに、今までこんなことは幾らでもあった。多少不利な場面でも私たちなら乗り越えられるそれだけの力を私たちは持っている」
嘘偽りなく、過信もなくただ事実を述べ仲間を鼓舞する長門。
その姿は、見た目は違えど当時の長門の荘厳たる姿がそのまま人になったように見えた。
いや、これこそが『長門』だ。日本が世界に誇った、世界に認められた戦艦。
姿が変われどその魂はずっと昔から変わってなどいなかった。

「さぁ、行くぞ！」
艦娘そして深海棲艦。互いのエゴを通すための戦いが今、始まろうとしていた。

◇

戦いは加賀と瑞鶴の艦載機を叩けたのが大きかったのか深海棲艦側が有利だった。
だが撤退するのと侵攻するのではどちらが有利かは言うまでもない。
加えて数では勝れど練度は艦娘たちの方が上だ。先程のように被害を出さないよう艦載機を退けられる確証もない。
「姫様！艦隊ノ七割ノ退却ヲ確認シマシタガコノママデハ……」
「弱音ヲ吐クノハ後ニシロ！マダ負ケタワケデハナイ、最後マデ諦メルナ！」
戦艦棲姫も鼓舞をするがいずれこの均衡は崩れるだろう。ならば、それよりも早く、より多くの仲間たちを逃すために全力を尽くす。
しかし、戦艦棲姫の思いを裏切るかのように突然とそれは訪れた。
「ッ……！」
「ヲ級、大丈夫カ！」
速度が急速に落ちたヲ級を見て戦艦棲姫が声をかける。自分自身でも原因が分かっていないのかヲ級は明らかに動揺をしていた。
「誰カ、ヲ級ヲ連レテイッテクレ！コノ場ハ私ガ……」
その時、戦艦棲姫は喋りかけた口を閉じて絶句した。視界の端に今も自身の不調に混乱しているヲ級に狙いを定めている艦娘の姿が見えたからだ。
今から止めに入っても間に合わない。
しかし、庇うにしてもヲ級までの距離が遠く間に合わない。
だがそれでも戦艦棲姫は諦めたくなかった。身を翻し全力でヲ級の元へと向かった
（嫌ダ。私ハ、モウ仲間ヲ失イタクナイノニ……）

刻一刻と時間は進み砲撃を行う寸前になった艦娘。無駄だと分かっていても自分にはこれしかできない。
そして、遂に砲撃が放たれた。
「ヲ級！」
しゃがれた声で叫ぶ戦艦棲姫。その声に反応してゆっくり振り向くヲ級。
その時、戦艦棲姫は言葉を失った。
笑っていたのだ。自分の命が今なくなろうというのに何の不安も無いような優しい笑顔で。
それはかつてル級の死ぬ間際の表情にとても似ていて。だからこそ戦艦棲姫は認めたくなかった。また目の前で死なれるなど死んでも御免だと。
「ヲ級ウウウーーーー！」
黒い風が吹き砲弾は確実にヲ級に当たる軌道を描く。
戦艦棲姫の叫び声は砲撃が着弾した音にかき消され誰にも聞こえなかった。

◇

ヲ級は己の運命はここで尽きたと。そう思っていた。元より既に自分は死んでいるような身だ。それが今更死んで何を思うというのか。
「……？」
しかし、覚悟をしていた痛みが未だにこない。それにまだ戦闘をしているはずの仲間たちや、艦娘たちの砲撃音も聞こえなくなっていた。
なぜか。それは目を開けた瞬間に分かった。
「!?」
自分を庇うように立つ人間。本来敵であるはずの人間がなぜ　自分を庇っているのか。
それに周りの仲間たちや艦娘たちもソレを見て動きが止まってい

た。
「ふぅ……。何とか防げて良かった……」
目の前の人間は息を大きく吐き安堵していた。しかしその言葉の意味を理解できずヲ級はさらに困惑した。
『まさか庇うんじゃなくて、砲弾をブレードで叩き斬るとはな』
そう。ラキラはヲ級に砲撃が当たる直前に目の前に滑り込み左手に装備されているブレード（02—DRAGONSLAYER）で文字通り切り落とした。
「いや。いくらお前（アリーヤ）でも直撃は危ないと思ってな。不安だったけどやってみたんだよ」
『言えばどれくらい耐えられるかくらいは教えたんたが。まぁいい。前にコジマ粒子が無くても動けるといったがＰＡもある程度は生きている。ただ、あの世界ほど出力は高くないから基本は避けた方がいいな』
「そうか。なら良かった」
そう言いながらラキラはヲ級へと振り向く。得体の知れない存在に見つめられヲ級はビクッと体を震わせた。
逃げたいと思いながらも体は思うように動かず、後ずさることしかできない。自分はどうされてしまうのか。結局殺されるのか、それとも死よりももっと惨（むご）いことをされるのか。
そんな思考を繰り返し、身を震わせていたヲ級だったが――
「怪我はないか？」
返ってきたのは自分の身を案じる優しい声だった。それと同時に腰が抜けていた自分を立ち上がらせるために手を差しのべてきた。
それはヲ級にとって戦艦棲姫以外に初めて救われた時だった。仲間に助けられたことならいくらでもある。しかし、戦艦棲姫やラキラほどに優しさを感じたことはなかった。
だからこそヲ級は迷いなく頷きを返し立ち上がることができた。
「本当はもっと早くに助けに入れば良かったんだが……悪かったな」
そんなことはない、とヲ級は頭を横に振った。確かに危うく沈められそうにはなったが、助けてくれたことは事実だ。それ以外に何を望めるだろうか。

「ヲ級！」
そこへ戦艦棲姫が安堵した表情で向かってくる。
しかし、ラキラに向ける視線はひどく険しいものだった。それもそのはず。今まで、いや。これからもずっと敵であろう人間が深海棲艦を助けたのだ。警戒をしないほうがおかしいだろう。
「助ケテクレタコトニハ礼ヲ言ウ。ダガ解セン。貴様ノ目的ハ何ダ？ナゼ私タチヲ助ケタ？」
戦艦棲姫の質問にどう応答するべきか少々困った表情で悩むラキラ。やがて一巡し終えたラキラが出した答えは――
「なんとなく……かな」
「……ナニ？」
それはあまりに不純な動機であり同時に純粋な気持ちという矛盾を抱えたものであった。
「いやさ。他にも理由はあるんだ。だけど、なんて言うべきなのか、お前たちが助けを求めているように見えたんだよ」
「……フザケルナ！私タチガイツ助ケヲ求メタ、私タチヲ欺キ貶メル貴様ラ人間ガナゼ、私タチヲ助ケル必要ガアル！」
火山が噴火したように激しい怒りをラキラにぶつける戦艦棲姫。それをラキラは黙って受けとめていた。
「そうだな……。確かにそう思うかもしれない。だけど俺が助けようと思ったのはお前が死ぬつもりでこの戦いを乗りきろうとしたからだ」
「ソレガドウシタ。皆、ソレヲワカッタ上デ戦ッテクレテイル。ソレニ応エルベク私ハ――」
「お前こそ何も分かってないんじゃないか。本当に仲間がそれを望んでいるのか？お前がいなくなった後、普段と変わらず生活することができると本当に思っているのか？」
「クッ……」
戦艦棲姫はラキラの言葉に何も返せず言葉が詰まっていた。もちろんその事は考えていた。仲間もそれを承知で後を継ごうと思っていた。しかし、いざハッキリと言われると何も返せない自分が悔しく

てしょうがない。
「本当は分かっているんじゃないか？お前は仲間に必要とされていると。お前はただ、無責任にそれから逃げようとしてるだけだ。都合のいいようにな」
　自分の心の内を見透かして来るような視線に動揺をしながらも堪えるようにラキラの言葉を聞く。
「分カッテイル……。ダガ、コレシカ方法ガ思イツカナインダ……。モシ、仲間ガ沈メラレルト考エルト……」
　それは戦艦棲姫が溜め込んでいた仲間に隠していた弱音だった。ずっと一人で抱えていたそれはどんなに自分を強く見せようと無くせるものではなく、ラキラの言葉で遂に吐き出してしまった。
　いくら他の深海棲艦が強くなったとしても、自分の助けが要らなくなったとしても、いつも現実はそれを打ち壊す。
　それがどうしても怖い。自分がやって来たことは本当に正しかったのかと、自問自答を繰り返しこんなところまで来てしまった。
　だから――
「ダカラ、仲間ハ誰一人トシテ沈マセハシナイ。ソレガ私ガ償エル唯一ノ方法ダ」
　己の意志でハッキリと告げる。ラキラに何と言われようとこれはもう決めたことだ。曲げるつもりはない。
　だが――
「ったく。強情なやつだな。これじゃ仲間が苦労するよ」
『だから助けるんだろう？このお人好しが。まったく、大人しく人類に味方すれば良かったものを』
「そのお人好しについてきてくれたのはどこのどいつですかねー」
『……』
「だぁぁーー！怒んな怒んなって」
　先程までの重圧はどこへやら。ラキラはレイドと勝手に話始め戦艦棲姫たちは完全に置いてきぼりだった。
　やがて――
「……まぁ、お前の覚悟は分かった。だが俺は納得していない。だか

ら、俺が納得するようにさせてもらう」
「何ヲスル気ダ？」
「こっから先は俺が引き継いでやる。お前らはさっさと撤退しな。じゃないと更に被害が増えるぞ」
「……ナゼダ。ナゼソコマデ私タチニ……」
「言っただろう。俺が納得するようにするって。お前を救って他のやつらも助ける。それが俺の納得する結果だ。そのために俺は戦う」
艦娘たちの方へ体の向きを変え姿勢を低くするラキラ。それを見た艦娘たちも警戒を高めていた。
「イイノカ……？ソンナコトヲシテ？」
戦艦棲姫は自分の声が震えていることに気づかず質問を投げかける。艦娘と戦うということは人類の敵になるということに他ならない。戦艦棲姫は、その重大さを分かっていないのかと思い投げかけた言葉だったが、それを聞いたラキラは不敵に笑い。
「気にするな。元々こんなことでしか生きてこれないんだ。だからここは任せてくれ」
絶対の自信を込めた口調でそう断言した。
それを聞いた戦艦棲姫は目を見開き先ほどとは打って変わって穏やかな口調で。
「……アリガトウ」
それからの深海棲艦の行動は迅速だった。タ級を先頭に負傷している者に合わせながら撤退し、やがて艦娘たちの射程内から逃れた。
なぜ、艦娘たちが何もしなかったのか。それは目の前のラキラの圧に押さえつけられていたからだ。少しでも動けばその瞬間に沈められる。相手の正体が分からない艦娘たちでもそれだけはすぐに分かった。
「できるだけ艦娘（あいつら）を傷つけず無力化したい。ブレードの出力を最低まで下げてくれ」
『なんだ、カッコつけといて結局どっちつかずじゃないか』
「いいだろ、俺は艦娘（あいつら）を沈める理由がないんだからさ。それに少し話を聞きたいからやりすぎたら意味がない」

『まぁいい。だが出力を下げる分、刀身も短くなるから気をつけろよ』
「おう。そこんところは俺のことを信じろ。伊達にお前を扱ってきたわけじゃないさ」
相棒とのやり取りを艦娘に聞こえないようにし準備をする。
それはこれから一体、何が起こるのかを表していた。

第7話　道標

ラキラを目の前にして長門たちは身動きが取れなかった。それは相手の力量が分からないからという問題ではなく、下手に動けば即座に沈められるというその身から発せられる圧に抑えられていたからだ。後方で艦載機の発艦準備をしようとしていた加賀と瑞鶴ですら、距離があるというのに弓に矢をつがえた瞬間に水上に伏せられる自分たちの姿が想像できた。

「なぁ、あんたがこの艦隊の旗艦か？」

突然の問いかけに一時自分に聞かれたことが分からなかった長門。しかし、先程より圧が減り僅かにだが緊張が解れる。未だに油断はできないが今のところは問題ないと判断し、敵（ラキラ）の問いに答える。

「ああ、そうだ。私がこの艦隊の旗艦の長門だ」

「なら言っておくぞ。これが最後通牒だ。あんたらはここで退（ひ）いてくれないか？」

「断る」

ラキラの提案は即座に一蹴される。当然だ。彼女たちの目的は深海棲艦を沈めることだ。それを邪魔したラキラの提案に乗るなどありえない。無理はするなと言われたがここで退いては艦娘の名が廃る。

それが勇気であれ無謀であれ長門は一歩も退く気などなかった。連合艦隊の旗艦としての誇りも戦艦としての矜持も何一つ捨てることなどないとその瞳が語っていた。仲間たちもそれを承知の上で長門に付き従っていた。

「なんでそう、ハッキリと言うんだ……。もう少し考えるとか、撤退したっていいだろうに、どこに行っても戦こういうバカってのはいるもんなのか？」

『お前もそのうちの一人だぞ、バカ』

長門の即決に思わず独り言のように愚痴る。レイドに何の抑揚もない声で横槍を入れられたが不満そうな顔だけしてブレードを身構えた。それが開戦の合図と受け取ったのか艦娘たちも展開を始めよ

うとしていた。最後通牒といった手前、もう後戻りはできないが刃引きはしてあるのでそちらのほうは問題ない。
「各艦、輪形陣を形成しつつ敵艦へ砲撃！加賀と瑞鶴は艦載機の発艦を急げ！」
「了解！」
流石の練度と言うしかないが、艦娘たちは素早く陣を組みラキラの攻撃に備えていた。先程ラキラが滞空しているのを確認していたため、艦砲による攻撃より艦載機による航空戦の方が良いと判断した結果である。
敵の戦闘力がどれほどか分からないため加賀と瑞鶴を守るための最前の手と判断した長門だが、なにか胸の内に言いえぬ不安があった。
「第一次攻撃隊。発艦始め！」
「ここは譲れません」
矢を放ち艦載機を発艦させる加賀と瑞鶴。二人とも数は先の戦闘で少々減っているが、今回は残数の3割に相当する量を使った。さらに二人が装備している艦載機は高い対空性能を誇る「烈風」だ。二人の練度も踏まえれば撃破は無くともなにか成果は挙げられると艦隊の誰もが思っていた。
「遅いな」
一瞬、消えたと思えるほどの速度でラキラは後方へＱＢをし方向転換をした後上空へと向かっていった。現状、武装と言えるのはのは左腕に装備されたレーザーブレード（02-DRAGONSLAYER）のみだ。更には、まだ生身でのレイドの扱いに慣れていない。そのせいで全開のＱＢやＯＢはできない。
だが、この程度の相手をする分には問題ないとラキラは考えていた。
「なによあの加速、あんなの人が耐えられるわけないじゃない!?」
「ちょっとこれは予想外……かな」
目の前で起きたことを信じられないと瑞鶴と最上が呆然としていた。自分と加賀の能力を踏まえてもどうにかできると考えていた瑞鶴だったが現実は、放った烈風はラキラに追随することすら難しく未

だに距離が開いていた。
　他の艦娘たちもそれぞれ思うところがあっただろうが、今はこの化け物をどう相手するかを考えることしかできなかった。
　だが、もうそんな時間はないと告げるようにラキラは次の行動に移っていた。
　体を弾丸のようにし急降下をしていく。途中、烈風とすれ違うが発射された機関銃はＱＢによって避けられ、近くにいた数機がブレードによって斬り墜とされた。
『コジマ粒子がなくとも動くとは言ったが、ＰＡはないんだ。あまり無茶はするなよ！』
「ああ、分かってる！このまま最短距離で突っ込むぞ！」
　それと遅れて艦娘たちの対空砲火が始まるがこの程度の弾幕は数えきれないほどラキラは経験していた。直撃しそうな砲弾はブレードで弾きながら小破していた熊野へと狙いを定める。
　だが、それにいち早く気づいた長門が熊野とラキラの間に立った。不安が当たったなど後悔している場合ではない。
　――分かっていたならばすぐに行動に移せ。今、自分ができる最善の手を尽くせッ！
「チッ、狙いがずれるが恨むなよ！」
「砲塔の一つや二つくれてやる！」
　ジュワッと金属が溶けるような音が響き、長門の体が後方へ大きく弾き飛ばされる。
　ラキラの速度から成る物理エネルギーによる衝撃。直に触れていないというのに艤装を通じてくるレーザーブレードによる熱。それらにより片膝をつき長門の顔が苦痛へと歪む。
「長門さんッ!?」
　熊野が悲痛な声で叫ぶ。それに対し「大丈夫だ」といささか無理のある返答をしながら立ち上がる長門。
　これで長門の砲塔の一つが使用不可となったが被害はそれだけに収まった。ラキラは尾を引きながら再び上空へと向かい再度狙いを定める。自分たちの不甲斐なさに加賀と瑞鶴が歯噛みするが今は

残っている烈風を発艦させるしかなかった。
「大丈夫デスカ、長門!?」
「あぁ、砲塔が一つ使えなくなっただけだ。まだ戦えるさ」
ラキラから視線を離さず叫ぶ金剛。
気丈に振る舞う長門だが、ラキラにつけられた傷は、程度とは裏腹にひどいものに見えた。
砲塔は根元から融解しほとんど形を成しておらず、付近の素肌には熱によるやけどの跡がついている。
誰もが分かっていた。長門が無理をしていることを。
「そんな風に心配しなくていい。熊野は無事か？
「……はい。長門さんが庇ってくれたおかげでなんとか」
「そうか。なら、ヤツを倒すぞ」
艤装の調子を確かめる。幸い損傷した砲塔以外は問題なく動く。弾薬も燃料もまだ十分にある。
太股(ふとももの)辺りがやけどで、滲むような痛みはあるが大した問題ではない。衝撃も決して軽いものではなかったが伊達に戦艦を名乗ってはいない。これくらいならばあと数回は耐えられるだろう。
「……はいッ！」
「いい返事だ。加賀と瑞鶴も悔やむな。元々正体不明の敵だ、無傷で勝てるとは思っていない。それよりも今はヤツの攻勢をできるだけ崩すようにしてくれ、頼む」
「……了解しました」
「了解！」
再び艦隊の指揮を取り、立て直す。心配そうだった金剛も対空に意識を向け、半ば放心状態に近かった最上も熊野に諭されラキラを狙う。先程と変わらないように見える光景だったが今回は違う。長門の指揮一つで全員の戦意が高揚していくのを艦娘だけでなく上空で見ていたラキラも感じていた。
「今度はさっきみたいにはいかなそうだな」
『だがやることは変わらん。接近して叩き斬る。それだけだろう？それに、なんだか楽しそうじゃないか、お前』

「そうか?・そんなつもりは無いんだが。久しぶりの戦闘に無意識に体が反応してるのかもな」
　こちらに向かってくる烈風を眺めながら、己の胸の鼓動が高鳴っていくのをラキラは感じていた。こちらは刃引きもしているし命を取ろうとまではしていない。だが、艦娘たちは本気でこちらを堕とそうとしている。それだけでラキラが楽しむのには十分だった。
『さっきより数が多い。まずは艦載機の数を減らしながら詰めていくぞ!』
「オーライ!・それじゃあ、システム管理頼むぜ。相棒(レイド)!」
　鐘打つような返事とほぼ同時にＱＢをし迫りくる烈風を迎え撃つ。放たれる機関銃の弾幕をブレードで防ぎきるのは無理がある。だが、今まで数多くの戦いを経験したラキラは降り注ぐ弾幕の雨の中を上手くすり抜けていく。
　それでも練度の高い加賀と瑞鶴の艦載機の攻撃を全て避けるのは至難の業だった。
　装甲の薄いストレイドと言えどコア部分やアームやレッグパーツは装甲が厚くはなっているが、それ以外の場所や関節部分などはかなり脆い構造となっている。更には、フレームで体の大部分は覆われているが腕や脚、胴体の一部分は完全な生身だ。そういった部分に被弾しないようにしつつ、この弾幕の中、烈風を斬り落とさなければならない。
「あの数でも墜ちないというの……」
　放った烈風を見ていた加賀がポツリと言葉を漏らす。その視線の先では、時折被弾しつつも着実に艦載機の数を減らしこちらに接近してくるラキラの姿があった。ラキラが動く度に旋風が巻き起こる。いくら艦載機が編隊を組んでもラキラに直撃させることをできずにいた。その事実に加賀の中に徐々に焦りと恐怖が浮かんでくる。
「大丈夫ですよ、加賀さん」
　そっと静かに近づいてきた瑞鶴は、微かに震えていた加賀の肩に手を置いた。この不利な戦闘の中、どういう訳か瑞鶴は、にっと歯をむき出しにしながら笑っていた。それは自暴自棄や開き直りといった

表情ではなく、どこかこの戦闘を楽しんでいるように見える。
「貴女、どうしてそんな風に笑えるの？」
加賀にはなぜ瑞鶴がこの状況で笑えるのか理解ができなかった。いや、理解する余裕すら加賀の中にはなかった。
その質問に瑞鶴は何ともない様子で答えた。
「だって、嬉しいからですよ」
「嬉しい？」
「はい。加賀さんの隣で一緒に戦えて、あんな化け物みたいな敵を相手にしなきゃならない。そんなこと、この先あるかも分からないじゃないですか？それに……もし、この戦いに勝てたらその時私は成長できてるのかなって楽しみなんです。もしできたなら、加賀さんにまた一歩近づけるんじゃないかって」
「……」
加賀は静かに目を伏せる。
その言葉を聞いたとき内心加賀は、己自身を叱責した。
今まで、どんなことであろうと瑞鶴に勝っていると思っていたのに唯一、心だけは負けてしまっていた。傲慢にしか過ぎなかった自分にうんざりするが、それと同時に少々頭にきたことがあった。
「……呆れたものね。その程度で私に近づけるなんて思ってたなんて。あなたが見てきた私の姿はたったその程度しかできない艦娘だったの？」
こんな能天気で、鎮守府では騒いでばかりの娘に自分が追い付かれるなんてことは絶対に認められない。
加賀は、ゆっくりと視界にその間抜けた顔を入れながら勢いのまま言葉を発していった。
「私と簡単に並ぼうとすることにも頭にきたけれど、なによりも私のことをそんなに低く見られてたことに一番腹が立ったわ」
「か、加賀さん？」
「だから、教えてあげるわ。一航戦と並ぶとはどういうことかを」
矢筒から新たに矢を引き抜き、深く息を吸い込みながら引き絞る。
視線は決してラキラから離さない。必ず墜とす、と並ならぬ気迫が

体から溢れていた。その姿を瑞鶴は隣で固唾を呑んで見守っていた。
ぎりぎりとしなる弓。上空ではラキラが三次元に動きながら次々と烈風を切り墜とす。撃墜された烈風の残骸が海面へ落ちる。
ラキラが加賀の方へ視線を向ける。加賀は矢を放った。
新たな増援に舌打ちをするラキラ。だがこれで終わりではない。加賀は既に新たな矢を取り出していた。
「まだよ」
加賀は立て続けに第二射、第三射を放つ。これで加賀の矢はもう尽きた。それは実質、これが墜とされれば加賀はもう己を守る手段がなくなるということ。しかし、逆に考えればそれほどのリスクを負ってまでのことを彼女はこの攻撃に賭けていた。
「……必ず、成功させて見せるわ」
放った矢が艦載機へと変化し、ラキラを取り囲むように飛行する。
頃合いを見て加賀が艦載機に指示を出す。艦載機はラキラの全方位を囲む形へとなった。味方同士で被弾する恐れがある普段では絶対にしない、加賀が即席で組んだ編隊。それは大きな賭けではあったが、このまま続けていてもこちら側が不利になるという予想に基づいての行動だった。
『どうやら搭載していた艦載機を全部出したようだな。しかも今までと動きが違う。このままだと囲まれてやられるぞ?』
「冷静に報告してくれるのはありがたいが、生憎、数が多くて手が回らないんだよ!」
ラキラは苛立ちを露わにしながらも、一機、また一機と迫りくる烈風を斬り墜とす。視界の隅で新たに接近してくる烈風の姿を捉える。
P（プライマルアーマー）Aがあれば、と無いものねだりをする。だが、コジマ粒子が無いこの世界で完全ではないがネクストとして動けるだけまだましだろう。それでも、せめて全身にフレームがあったのなら、と考えてしまう。
生身の部分さえ無くなればある程度の無茶はできた。しかし、それがある今、そんな無茶をしようとは思わなかった。
故にラキラは避け続ける。無論、ただ避けるだけではない。迫りく

る烈風を少しづつ減らしながらチャンスを待ち続ける。
「レイド！ブレードの出力を上げろ。今すぐ！」
ラキラの言葉数は少なかったが、その思惑は文字通り一体となっているレイドに、それ以上言葉を発さずとも伝わった。
それでも返答がくるまでには僅かだったが隙間が生まれていた。
『……そんなことをしたらお前にデカい負担が掛かる。それにブレードやジェネレーターにもどんな影響が出るか――』
「ああ分かってる。だけど、これを突破するにはこうするしかない！死にさえしなけりゃそれでいい！だから、頼む！」
ラキラは必死になって嘆願する。ラキラがやろうとしていることは確かに、機体と装備の性能を見るに可能だ。それにラキラの操縦技術を踏まえれば十分実現はできる。
だがレイドは即座に返答することができなかった。ラキラの腕の良さは今まで一番近くに居たからこそ分かる。だからこそレイドは躊躇ったのだ。これをやればかなりの負担がラキラを襲うだろう。信用できる相棒だからこそ、大事な相棒だからこそ、レイドはあまり無茶はさせたくはなかった。
機械が意思を持つなど、ましてや感情があるなどと馬鹿げていると誰もが言うだろう。だが使うものがそれを大事に、長い時間を共に過ごしたからこそレイドは今ここに居る。
『……やれやれ、俺の相棒は傷つきたがりのとんだマゾ野郎だったらしいな』
（そうだな……。お前はいつもそうやって生きてきたな）
無茶をするなと言って聞くような奴じゃないことは最初から分かっていたはず。そもそもラキラが無茶をしなかったことがあっただろうか。ブリーフィングで何度言っても聞かず、酷いときに機体と身体共々ボロボロだったこともあった。
だが、ラキラは必ずミッションを成功させて帰ってきた。どんなに傷つこうとも、どんなに醜悪な姿を晒そうとも、生きて帰ってきた。
ならば、それだけで十分ではないか。現実にはありえない『奇跡』を起こすわけではない。

ただ少しだけやろうと思えばできるような『無茶』をするだけだ。

『タイミングはお前に任せる。一発、アイツらの度肝を抜いてやれ！』

「あぁ！分かった！」

そう答えるなり、Ｑ（クイックブースト）Ｂで方向転換をし烈風の渦の中心へと向かっていった。途中、何発か弾を貰ったが、痛みに気を取られる暇はない。元から数では負けているのは分かっている。ラキラはもう被弾の一つや二つ程度気にはしなくなっていた。

ラキラにとって今は、眼前と迫ってくる烈風を突破することが先決だった。ならば自分がすることは、その状況を覆す一手だけに集中していればいい。

「あの中に突っ込んでいったの!?」

「何をしようとしているのか全然予想がつかないわ……。それでも、あの数を突破するのは不可能なはず」

加賀は至って冷静だった。それは己に対する自信なのか、後輩の前でもう弱音は吐かないという意思なのかは分からない。

烈風を全て切り墜とすことは不可能に近く、あの数の中を無理に通ろうとすれば艦載機とぶつかり合い、全身が守られていないラキラにとって大きなダメージとなる。

どんな考えがあるにせよ加賀はラキラが烈風を撃墜しこちらまで接近してくるとは考えていなかった。

――だが、それは相手がまともであればの話だ。

「いくぜぇぇぇーーー！」

自殺とも思えるような行為だがラキラは恐れることなく烈風の波に呑まれていった。

すぐにラキラの声は聞こえなくなっていた。聞こえるのは波の音と烈風のプロペラ音のみだ。

艦娘たちはラキラが無謀な行為をして自滅したと誰もが思った。最期まで対空砲火をしていた金剛と長門でさえそう信じていた。それが楽観的過ぎる考えだったが、彼女たちはそれだけ精神的にも肉体的のも疲労していた。

だが――

「はあぁぁぁぁぁーーーっ！」

瞬間、内側から西洋の剣のように飛び出した光が一瞬にしてあらゆる方向に薙ぎ払われた。

その剣の大きさは、規格外と言うべき他なかった。

十メートルを優に超える刃にその半分程もある身幅。不規則に波打つ、紫色に発行する刀身は見るものすべてを引き込むような危うさがあった。

さらに、それほど巨大な剣をラキラは通常『線』として扱う剣を『面』として振るった。当然周囲を飛行していた烈風たちが無事なはずもなく、今でも焼け残った残骸が海上へと落下していく。

「はぁ……はぁ……」

荒い息を吐くラキラの全身には滝のように汗が流れ出ている。自身の体と、一体化したレイドの両方の負荷がラキラにのしかかっていた。既に、ブレードも無理に出力をしたせいで形を保てず、本体からは火花が飛び散っている。

もはや満身創痍といった様子だがラキラはまだ止まらなかった。未だ長門たちを無力化できていないというのにこの有り様には自分でも笑ってしまうがこのまま彼女たちを放っておくこともできない。性能差は歴然だと思っていたが、存外、数の差というものは辛いものがあるとラキラは改めていた。

それに加え、どれだけ自分が機体（レイド）に甘えていたかもわかった。自分があそこまで戦えたのは本来のネクストにあるＰ（プライマルアーマー）Ａに頼っていたことが大きかった。レイドに言われたとおり、無いなりに考えて動いていたつもりだったのだが現状を見るとよほど考えが甘かったらしい。

「うそ……。こんなこと、ありえるはずが……」

声を震わせながら膝から崩れ落ちる加賀。他の艦娘たちもラキラの規格外の性能に言葉を失っていた。

ラキラを倒すための大きな賭け。それは、彼女がこれまで培ってきた技術を証明するものでもあった。しかし、ラキラはそれを凌ぎ、一

瞬にして状況を一転させた。
己の技術が通用しない力の差、普段は醜態を見せまいとし、内心では大切に思っている後輩の前での失態。その二つが加賀の自信（プライド）を崩していく。
「来るぞ！各艦、再度対空砲火を厳としろ！瑞鶴は残っている烈風を出せ！」
「は、はい！」
長門が命令を下したと同時にラキラも接近を始めていた。だが、その動きは先程より遅い。
当然だ。無理にブレードの出力を上げたため体には過剰な負荷がかかっている。そんな状態で先程までと同じように動けるはずもなく、その動きはもはや落下に近い。しかし体がボロボロになってもその目に宿っている意志だけは煌々と輝いていた。
「はぁ、はぁ……。レイド……機体の状況はどうなってる？」
『ブレードはオーバーヒート間際で振れてあと一度。負荷のせいでＥＮ回復も遅れている。それに伴って各部ブーストも性能がガタ落ちしている。ハッキリ言って満身創痍だ』
「上等……。一回で決めればいいんだろ？だったら、あの陣形の中に飛び込んでまとめてぶった切ればいい」
『あぁ。それだけの大口を叩けるなら何の問題もない。艦娘たちもまだ混乱している状況だ。今しかないぞ』
腐ってもネクストだ。たとえ満身創痍だとしても満足に連携も取れていない艦隊の弾など当たりはしない。なけなしのエネルギーでＱ（クイックブースト）Ｂを繰り返す。
徐々に距離は縮まっていき、やがてラキラの射程距離に入った。その間にレイドのＥＮ回復機能も必要分程度には回復していた。
ラキラはブレードを構え直し、溜まったエネルギーを解放する。
「これで終わらせるぞ！」
『もっと早くに決めてくれたら良かったんだがな。まぁいい。さっさとしてくれ。でないと俺も少々キツイ』
「……なんか急に素っ気なくないかお前？」

『いいから、疲れてるんだ。軽口は後でいくらでも聞いてやる』
開戦時と同じように軽口をたたき合う二人の様子は先程まで満身創痍とは思えないほどだった。しかし、機体には未だ火花を散らしている部分もある。それほど余裕がないことはラキラも承知の上だ。
空気抵抗を減らすべく、身体を地を這うほどに下げ弾幕を潜り抜けながら狙いを定める。
「なっ!?あんな体勢で!?」
「あんなボロボロなのに。まだあれだけ動けるの!?」
底が見えぬ性能に恐怖すら覚えた艦娘たちだったが、もうそこはラキラのブレードの届く間合いだった。
瞬間、ラキラは更に速度を上げた。隠していたわけではない。そこまでする必要がないと判断していたのだ。油断としか言えないが、今はそれが役に立った。
先程までの速度に目が慣れてしまっていた長門たちはラキラの姿を見失っていた。そして、その瞬間に勝負はついた。
「っ……!?」
気づいたときには、装備していた艤装が全て切断されていた。その次に訪れる身を焦がすかのような熱に膝をつく。苦悶の表情を浮かべる長門たちをラキラは。一人海の上に立ち見下ろしていた。思っていたよりも損傷の激しい艦娘たちを見て少々バツの悪い顔をするが、長門に見られたら突っかかれそうなのですぐに直す。
「なぜ……止めを刺さん……?」
まだ息が整わぬうちに長門が上半身を起こそうとしながらラキラに問いかける。ろくに体も動かないというのに未だその瞳には闘志が宿っていた。
「その必要がない。俺の目的はアイツらを逃がす時間を稼ぐこと。お前たちを沈めたって何の得もありゃしない。本当は楽に終わるはずだったんだがおかげさまでこっちもボロボロだ」
「ならなぜ、奴らに手を貸した……?」
「……」
「そのような見たことのない艤装をつけていても分かる。貴様は人間

のはずだ。私たち艦娘が守る存在であり、私たちを指揮する者……。なのになぜ人類の敵に手を貸す？」
「それは……俺の心に従ったからだ」
「心だと？」
「お前たちが人類の味方だってことは分かっていた。深海棲艦が敵であることも。アイツらも最初は俺のことを敵だと思っていた。でも戦艦棲姫（アイツ）は攻撃をしてこなかった。むしろ俺たちの話を聞いた後見逃そうともしてくれてたんだぜ？」
「そんなこと、あるはずが……」
『オレの中にその時の音声がある。疑うというなら聞かせるが？』
「っ……いや、いい。そんなヤツも確かにいたな……」
　不意にあまり思い出したくない記憶が蘇り目を伏せる長門。少し懐かしむ様子も見受けられたが、それもすぐに消え悔しさを感じさせるような表情へ変わった。過去に何かしらの因縁があることは戦艦棲姫の言動から薄々察してはいたが、ある意味似た者同士だなとラキラは思う。
「話を戻すぞ。その直後お前たちが攻めてきた。その時の戦艦棲姫（アイツ）の姿を見てどうしてもこいつは守らなきゃダメだって思ったんだよ。戦艦棲姫は過去のことも含めて仲間のために自分の命を捨ててまで償おうとしてた。まだ付いてきてくれている仲間もいるってのに。そんなの放っておけるわけないだろ？一人だけ先に逝って仲間たちを残すなんて俺には許せなかった」
　長門も戦艦棲姫と同じように己を犠牲にしてでも勝利を手に入れようとしていた手前口をはさめずにいた。気づけば艦娘全員がラキラの方へ神妙な面持ちで顔を向けていた。
「それにな、恥ずかしい話だが戦艦棲姫（アイツ）はな、似てたんだよ。俺の大事な人に。弱い奴に手を差し伸べて、口うるさいけど面倒見てくれて、なにかある度に心配してくれる、そんなあの人に……。別に戦艦棲姫のことを詳しく知っているわけでもない。会って一時間もたったかどうか。だけど、理屈とか抜きにそう思っちまったんだよ。コイツは俺が守らなきゃならないんだって」

「そんな感情的な行動で人類を敵に回すというのか、貴様は？」
「さぁな。人類の敵になろうと思ったわけでもないし、自分の命を犠牲にしようとしてた戦艦棲姫が見てられなかっただけだ。だが、アイツらを沈めようとするなら俺は喜んで人類の敵になる」
肌を心地の良い風が通り抜ける。自分の気持ちをハッキリと言えたからそう感じたのだろうか。
些か面倒なことになってしまったと思うラキラだったが、何にせよこれからどうするかは決まっていた。
「お前らが何と言おうと、俺は戦艦棲姫に付いていく。目を離した隙にまた自己犠牲にでも走りだされたら困る。それにこの世界についても聞きたいことがあるしな。レイドを使ったとしても知れることには限度があるだろうし」
『……』
「待て、この世界とはどういう意味だ？」
「あぁ、言ってなかったか。実はな、この世界とは別の世界で戦ってたんだが、紆余曲折あって負けちまってな。それで目が覚めたらこの世界に来て、当てもなく彷徨ってたらこんなことに巻き込まれたってわけだ」
死んだ、という言葉に長門たちは一瞬驚いたような表情を見せた。そのことを当の本人は大して気にしていないように話すのだからこちらの毒気も抜けてしまうというものだ。
それを他所にラキラは昔のことを思いだしていた。ロクな世界ではなかったが退屈はしない。戦いを求めれば自ずとやってくる。むしろそんなことしかなかったような世界だったが不満はなかった。
それもやはりセレンがいたというのが大きいのだろうが。
「あなたの世界でもこの世界と同じように人類の敵がいたのデスカ？」
金剛が興味本意にラキラに尋ねる。
ラキラは苦笑を浮かべながら金剛の質問に答えた。
「そうだったならもう少しまともな世界だったんだろうが、生憎とそんな都合のいい存在はいなかった。俺が戦っていたのは人間さ。あ

の世界ではそれが普通だった」
「人間同士で？なんでそんなこと……」
『生きるためだ。人間は闘争によって生きてきた。それが今も続いているだけだ。この世界の歴史だってそうだろう？今じゃ深海棲艦のおかげで世界中で同盟が結ばれているが、その前は様々な国が互いを牽制し合ってたそうじゃないか。深海棲艦が現れなかったら遅かれ早かれ俺たちの世界と同じような道を辿っていたかもしれないぞ？』
「それは……」
　レイドの言っていることは正しい。太古の時代から人間は戦うことで生きてきた。それが時代とともに変化しただけで、人間の闘争本能は未だ消えてはいない。あまりに不躾な物言いに言い返したくなるが正論が故言葉が出ない。
　その様子にラキラが申し訳なさそうに頭を掻きながらフォローを入れる。
「あー……。レイドはこう言っているがあまり気にしないでくれ。あくまで可能性の話だしコイツはちょっと口が悪くてな。気分を悪くしたのなら謝る」
「いいや、事実なのだからそれは受け止めなければならんだろう。貴様が謝る必要はない」
「そう言ってくれると助かる。コイツも根は悪くないんだがな」
『……うるさい。それよりさっさと話を進めたらどうだ。俺たちの身の上話なぞしてても時間の無駄だぞ』
　少し不機嫌そうにしながらレイドはこれからについて話を進めようとしていた。
　もう少し他人に愛想よくできないかと思うラキラだったが、これも愛嬌かと一人で納得していた。
「お前たちの上の奴と話がしたい。通信は繋げるか？」
「待て。貴様に手を貸す義理は無いはずだ」
「それはそうだが、このままじゃお前たちも回復するまでは動けないだろう。この海域も完全に制圧したわけじゃなさそうだし、アイツらみたいな戦う気のない深海棲艦ばかりとは限らないし」

「それでも貴様の手を借りるなど……」
「……良いんじゃないかな長門さん。僕にはこの人が悪い人には見えないよ。さっきも言ってたけど、時間稼ぎだけが目的だったみたいだし、もしそうじゃなかったら僕たちはもう海の底に沈んでた。彼にそんな気はなかったとしても僕たちには借りができたわけだし、ここはひとつこれで貸し借りなしってことにしないかな？」
長門は最上の提案に顎に指をあてながら思案する。唸りながらも借りを作ったままは嫌なようで渋々といった様子で最上の提案を飲み込んだ。
「仕方ない……。金剛お前の方から提督に通信を繋げてくれ。私の艤装はダメージを受けすぎて使い物にならん」
「了解しましター！」
嬉々とした様子で金剛は鎮守府と通信を始めた。理由としては恐らく……というかほぼ絶対、提督絡みだからだろう。
その様子を横目にラキラは損傷個所を確認しながらこれからのことを考えていた。
恐らく、これからはまたあの世界と同じように戦いを続ける日々が来るだろう。それについては何も問題はない。だが、正義も悪もなかったあの世界と、明確な悪とされている深海棲艦がいるこの世界とでは勝手が違ってくる。自分の身の振り方もいつかは考えなくてはいけないだろう。
戦艦棲姫を守りながら自分はどこへ向かうのか、そんなことを考えてしまう。
それでも、今はまず目の前のことだけを考えるようにしよう。先のことはその時にしか分からない。
そもそも自分は考えるのは得意ではない。
戦うことしか能がない。
大方人として褒められるようなこともない自分がこんな感情的に動くとは思わなかった。
しかしこの気持ちはきっと昔からあり続けたものなのだろう。
拾われた恩、助けてくれた恩。それに対する感謝の心。まともな心

などないと思っていた自分に残っていた人間らしさ。
戦艦棲姫は自分の進むべき道を照らしてくれた。右も左も分からない真っ暗な海の上で目印となる灯台のように彼女は居てくれる。それはセレンと同じだった。
ただ一つ違うことは、今度は自分が守る側になったということ。死んだ後に恩返しというのもおかしな話ではあるし都合のいい話でもあるが、この気持ちに嘘はない。
だったら今は戦艦棲姫の手助けをできる限りやろうと、そう思う。
「そういえば……」
状況を整理していてふと思いつく。あの二人はどうなったのだろうと。生き延びているなら特にこれと言って何もないが、自分が死んでしまってこの世界にきたというなら……。
最後の瞬間はよく覚えていないが、もしかしたらあの二人も……。